

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷(株)

(題字…中村信一 十全同窓会会長)

十全同窓会会長就任の挨拶

十全同窓会会長 中村 信 一



同窓会会員の皆様には、ご清祥のこととお慶び申し上げます。

本年七月五日に開催された同窓会総会において、佐藤保前会長のあとを受け、会長に選出され、大役を務めさせて頂くことになりました。偉大な先人達により受け継がれてきた十全同窓会の伝統・歴史を顧みると、身に余る光栄と存じますとともに、責任の重大さを痛感している次第です。

十全同窓会は、文久二（一八六二）年に淵源を有する医学部の同窓会として昭和七（一九三二）年に創設され、すでに八十二年の伝統をもつこととなります。

伝統は単に歴史を刻んだものではなく、時代を反映し、ときには時代を先取りして、新たな事象・革新を生み出し発展してきたものでありましよう。その伝統に立脚し、「会員相互の親睦を計り、母校の発展を期する」とする同窓会の目的に沿うべく、努力させて頂きたく存じます。会員皆様のご教示・ご支援、また、本部ならびに全国各地支部の役員の方々のご協力を切にお願い申し上げます。

現存の会員数は、準会員としての在学生を含め、八千二百余名を数えております。同窓会活動は、七月上旬に行われる総会の他、十全同窓会会報やホームページによる医学類・医学系の情報提供、各支部総会の開催と本部との交流、在学生（六年生）に対する高柳奨学金の支給、名簿発行等が主たる事業となっております。

会報は編集委員のご尽力により、近年『学生コーナー』『十全昔話』『Juzen FORUM HISTORICUM』『十全歴史ひろ

ば』等の新しい企画が加わり充実し、会員には母校の状況・同窓会会員の活動状況を知る上で極めて有益であり、喜ばしい限りです。また、支部総会は昨年は全国三十四支部の内十五支部で開催され、参加者も三百四十余名にもおよび、いわば、同窓会活動の中心を担って頂いております。支部活動の一層の高まりをお願い申し上げます。私自身も、できるだけ支部総会には参加させて頂き、母校の最新の情報をお伝えすると共に、会員皆様からのご意見を頂戴する等、交流を深めたく存じます。一方、お膝元の金沢における総会の不振は十数年来憂慮され、幾つかの試みを行うも、改善に至らず残念であります。―故郷は遠きにありて思ふもの―（室生犀星）かとも思いますが、大学も金沢の町並みも大きく変わり、来年三月には北陸新幹線が開業します（金沢―東京、二・五時間）。これを契機に、母校金沢大学・金沢の街に想いをこめて、多くの同窓会員の方々がご出席下さるよう誌上をお借りしてお願い申し上げます。

時代の反映でしょうか、入会率の低下傾向（過去五年間、九八・九％、八三・二％）、会費納入率の低迷（過去五年間、三六・六％、四五・五％）等幾つかの課題がございますが、少しでも良い方向へと力を尽くしたく存じます。

もとより浅学非才ではありますが、私を育てて頂きました母校への恩返しを致すべく、これまで理事・会報編集委員長・理事長・副会長として本同窓会の運営に関与させて頂きました経験を生かし、会員諸先生のお役にたつよう微力を尽くす所存であります。何卒、同窓会員皆様の一層のご指導・鞭撻をお願い申し上げます。

目次

会長就任挨拶	1
就任挨拶	4
平成二十六年度オープンキャンパス	8
創立百五十周年記念事業の進捗状況	9
総会記事	11
教授就任講演	14
臨床研究棟（C棟）竣工記念式典	17
医学類福祉施設棟 食堂・購買	17
オープン記念セミナー	18
追悼	20
受賞	22
学会報告	22
金沢大学関連病院院長会議	23
御遺骨返還式・合同慰霊祭	23
医師会コーナー	24
第六十六回西日本医科学学生	25
総合体育大会を開催	26
十全学術行脚 第二十五回	28
病院紹介	30
教室だより	32
支部だより	34
クラス会	36
十全昔話	39
学生コーナー	40
ホームカミングデイ	40
医学展二〇一四開催に向けて	40
編集後記	40

十全同窓会理事長就任の挨拶

大井 章 史



この度、加藤聖理事長の後任として理事長職を拝命いたしました。会員の皆様には日頃より医学類の学生支援や卒後研修などで大変お世話になっており、改めて感謝申し上げます。

私は昭和五十四年に医学部を卒業、旧第一病理学教室、旧がん研究所外科で勤務の後、平成十年から山梨医科大学病理学講座第一教室に赴任、平成十七年に分子細胞病理学に戻ってまいりました。丁度この年に、基礎研究棟の一部改修が終了し、真つ先に新しい校舎へ引っ越しをしたことを覚えています。また小立野キャンパスでは薬学部およびがん研究所の角間への移転、附属病院の改築と目覚ましいインフラ整備がおこなわれ、平成二十一年に念願の新病院の落成を迎え、平成二十六年には遅れていた臨床研究棟の完成と新しい医学図書館の落成を迎えました。これらのキャンパス整備にあたっては、創立以来約百六十年に近い歴史と、現会員数約七千名を擁する本会の人的、物的支援が無くては到底成し遂げ

られなかったことでした。ここにあらためて会員諸兄に熱く御礼申し上げます。

更に平成二十七年から国のキャンパス重点整備事業として、約二億円をかけて、医学部正門から十全講堂正面までのプロムナード建設及び記念館の改修とその周囲に知的創造のためのスペースが建設されることになっていきます。これにも、同窓会の基金の協力が有つてのことです。また金沢市との共同事業で、医学部前に遊歩道が整備されることも決定されています。現在キャンパスには「若き医学徒の像」や「高安右人の像」、「DNA of Library」が配されており、academicな雰囲気中にも芸術の香りが醸成されつつあるように思います。

このようにキャンパスは間違い無く数年のうちに素晴らしいものになります。問題は中身です。残念ながら、改築された基礎医学研究棟の外観は配管が剥き出しで、造形的には、なんの魅力も無いものにはなりましたが、これを輝く学問の殿堂と替えるのは我々の責務と考えています。医薬保健学総合研究科では新たな大学院の立ち上げの産みの苦しみのただなかにあり、医学系では現在空席の六研究分野主任教授の選考をしなければなりません。また米国が二〇二三年から、国際基準に認定されていない医学校からの卒業生には米国の医師免許試験の受験資

格を与えないことを宣言して以来、とにかく国際基準に対応した医学教育と、これに合わせた医学教育カリキュラムの改革に迫られています。附属病院は臨床研究中核病院の選考に漏れ、まさに旧六グループの位置を維持していけるか否かの瀬戸際でもあります。

このような状況下、今後も母校を支える同窓会で有り続けるために、新理事長としての最大の責務は同窓会員の確保であると考えています。残念な事に、この数年、新会員の減少が続いています。これはいわゆる「欧米化」の影響でしょうか。NHK朝の連続テレビ小節「花子とアン」でブラックバーン校長先生の贈る言葉「あの時代が一番幸せだった、楽しかったと心の底から感じるのなら、わ

十全同窓会会長退任の挨拶

佐藤 保



平成十八年に竹田会長の後任として就任してから、早くも八年の歳月が流れました。就任当初から、金沢大学医学部創立百五十周年の記念事業が予定されておりましたので、記念事業の遂行が私に与

たしはこの学校の教育が、失敗だったと言わなければなりません。」とありました。確かに欧米人のモラルは常に前を向いて向上を目指すものであり、あまり同窓会に愛着が無いのかもしれない。しかし我が国では、最も売れている総合月刊雑誌には「同級生交歓」の欄が数十年続いていることを考えると日本人のDNAはきつとこれが嫌いではないと思います。同窓会に入会しないのは自由ですが、しかし、同時に入りたいと思っても入会できないのも同窓会です。会員が誇りを持てる同窓会であり続けるように会員皆様の暖かいご支援を賜りながら、本会発展の為にできる限りの努力をいたす所存であります。

えられた使命であろうと自覚しております。しかしこの時期は大学の独立法人化と重なり、目前に大学自体が改革にせまられており、我が国もリーマン・ショックの影響で、デフレ経済にあえいでおりましたので、私自身の個人的能力をはるかに超える厳しい条件下での記念事業の実施となりました。幸いにして歴代の医学類長、同窓会理事の方々のご尽力と、全国十全同窓会支部、会員のご協力を得て、事業の数々を盛況裏に終えることができましたことを改めて感謝申し上げます。

十全同窓会理事長退任の挨拶

加藤 聖



平成二十二年七月から、二期四年間に亘り十全同窓会理事長を務めさせていただきました。浅学非才の私をこれまで支援していただきました同窓会員の皆様、佐藤会長始め役員理事の諸先生方にここに厚く御礼申し上げます。

この四年間での最も記念すべき事業は、平成二十四年七月七日に催された医学部創立百五十周年事業であります。寄附のお願いで各支部を廻り、ご説明させていただいたことがつい昨日のこの様に思い出されます。記念式典の特別講演では、本庶佑先生の「遺伝子が語る生命像」、安藤忠雄先生の「これからの日本のあり方について」を拝聴し、深い感銘と感動を覚えました。また、記念パーティーには六百名を超える方々にお集まりいただきました。そして、医学図書館へは十全スタジオという小ホールを寄贈

していただきました。改めて会員皆様に感謝と御礼を申し上げます。

もう一つ忘れられないことは、就任間もない平成二十三年三月十一日に悪夢のような東日本大震災が起こったことです。岩手、宮城、福島を現地で見るにより、被害の大きさにただただ驚愕致しました。

しかし、自らも被災された会員の皆様、震災直後から、医療の現場で先頭に立って活躍されているのを目の当たりにし、感動いたしました。一方、プロムナードや記念館改修も予算化され、十全講堂周辺もここ数年で見違えるように整備されることと期待しています。今後は一会員として後輩諸先生のご活躍と本学の末長い発展を祈念しています。

最後になりましたが、これまでの四年間に会員皆様方から賜りました暖かい叱咤激励にもう一度感謝申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

金沢医科大学病院 院長に就任

松本 忠美 (昭和五十一年卒業)



平成二十六年四月より、金沢医科大学病院の病院長を拝命しました。

私は、昭和五十一年に金沢大学を卒業後金沢大学整形外科に入局しました。その後、関節外科、特に股関節外科を専門に研鑽を積み、平成元年より平成十一年まで金沢大学整形外科の助教授を務めました。その後平成十一年より金沢医科大学整形外科の主任教授になり、平成二十年六月より二十六年三月まで金沢医科大学の副理事長を務めた後、今度、病院長に任命されました。

金沢医科大学病院は、創立四十周年を迎え、病院改築工事の最中で三年後に新しい病院が完成し、すべての面で診療体制が整い充実します。

皆様もご存知の様に、最近医療行政が厳しく金沢医科大学病院も特定機能病院の問題や、七対一の急性期病床の問題など多くの難問をかかえております。又、日本の医療全体が医師と患者の間に信頼関係が重要な時代を迎えております。こんな時こそ、何とか原点に返って患者中心の質の高い医療を行っていきたいと考えております。

どうか十全同窓会の皆様の温かい、ご支援、ご協力を賜ります様よろしくお願い申し上げます。

す。残すところは十全講堂までのプロムナード整備ですが、これも大学の努力で概算要求を得ることができ、近い将来完成されることに疑いはありません。ここらが引き時であろうと信じ、今期で辞任させていただきます。

私の任期中に起こったもう一つの忘れえない出来事は、三年前の東日本大震災であります。この災害にあたって、同窓会として何をすべきか、何ができるか、考えあぐねて右往左往しておりましたが、加藤理事長がいち早く東北各県を尋ねられ、会員の消息・安否の確認とお見舞いをしていただきました。その決断と行動力に深く感謝申し上げます。この震災は戦後日本の復興と繁栄の歴史に大きな疑問を投げかけました。政治、経済、社会の在り方がはたして正しかったのか、国民一人一人の心に問いかけており、今もその回答が得られていない状況であります。

加えて我が国の少子高齢化は世界に類を見ない速さで進んでおり、今年一月の人口動態調査では二十四万人減少し、その趨勢は全国三十九県に及んでおります。東京一極集中から地方へ人口の再配分ができるかどうか、事態は非常事態宣言にまでおよんでいます。同窓会組織としては、卒後臨床研修と個人情報保護法の影響で、一時期七〇%まで落ち込んだ卒業生全員の会員加入と、同窓会帰属意識の回復が今後の課題でありましょう。幸い、後任には中村前学長が就任されましたので、大所高所に立った同窓会運営を期待致します。最後に今後の十全同窓会の益々の発展と、会員の皆様のご健勝を祈念して退任の挨拶と致します。

就任挨拶

井上 啓博士

金沢大学医薬保健研究域附属脳・肝インターフェース
メデイシン研究センター生体統御学部門教授に就任



平成二十四年四月一日付で、金沢大学医薬保健研究域附属脳・肝インターフェースメデイシン研究センター生体統御学部門・教授を拝命いたしております。大変遅ればせながら、紙面をお借りして、ご挨拶を申し上げます。

私は、平成六年に神戸大学医学部を卒業後、神戸大学医学部糖尿病代謝消化器腎臓内科にて、内科医としての研修を受けております。平成九年からは、神戸大学大学院医学系研究科春日雅人先生のもとで、肝糖脂質代謝制御の分子メカニズムの解明に取り組み、特に脳・肝臓の臓器連関による糖代謝調節の分子メカニズムの解明を行ってまいりました。平成十八年に、米国ソーック研究所に留学後、平成十九年から本学フロンティアサイエンス機構特任准教授に着任し、肝臓機能と脳・自律神経との臓器連関の分子基盤の解明を目的として、独立した研究室を運営する機会をいただき、今日まで研究を続けております。

平成二十三年より、本学医薬保健研究域に、脳と肝臓の学術領域研究に加え、臓器連関の学術領域の連携・推進の一層

の強化することを目的として、脳・肝インターフェースメデイシン研究センターが新設されました。そのような中で、平

佐藤 純博士

金沢大学医薬保健研究域附属脳・肝インターフェース
メデイシン研究センター分子神経科学部門教授に就任



平成二十四年四月一日付で本学脳・肝インターフェースメデイシン研究センター分子神経科学部門の教授を拝命しました。また、医薬保健学総合研究科脳医科学専攻 神経発生学研究分野教授を兼任させて頂いております。

私は平成十二年に東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻 西郷薫先生のもとで博士号を取得しました。この時から現在に至るまでショウジョウバエをモデル動物として用いて研究を進めております。学位取得後はカリフォルニア大学サンフランシスコ校(Thomas Kornberg教授)の研究室で博士研究員を、また平成十四年からは東京大学分子細胞生物学研究所 多羽田哲也先生の研究室で助手お

成二十四年に本研究センター教授としての機会を頂きました次第です。

脳は、インスリンなどの液性因子やグルコースなどの代謝物の変化を感じ、糖脂質代謝から細胞増殖までの幅広い肝臓機能調節を行っています。そこで、私も研究室では、脳による肝臓機能制御の分子機構の解明とともに、脂肪肝など

谷口 巧博士

金沢大学医薬保健研究域医学系
機能回復学教授に就任



よび助教をつとめました。この頃からハエ視覚系の神経発生に着目して研究を進めておりましたが、次第に脳のモデル系としてより魅力的であり、当時ほとんど研究が進んでいなかった視覚中枢の発生機構に興味を持つようになりました。平成二十年二月より本学フロンティアサイエンス機構のテニユアトラック特任准教授として独立した研究室を主宰し、ハエ視覚中枢を用いた神経科学研究を推進して参りました。この間、平成二十二年よ

の病態における脳・自律神経・肝臓連関の役割、さらには、治療応用への可能性を探索することを目指しています。

十全同窓会の先生方には大変お世話になって参りました。厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻を頂戴できますように、よろしくお願い申し上げます。

りJSTさきがけによる支援を受け、脳神経系の機能を産み出す発生メカニズムの研究を発展させることができました。その後テニユア審査に無事合格したため、現在のポジションにてこれまでの研究を続けさせて頂いております。最近ではこれまでの発生機構から明らかにしたシグナル分子の働きを数理モデル置き換え、コンピュータシミュレーションによる解析により、分子遺伝学的な研究では踏み込めなかった定量的な研究を進めようとしております。

十全同窓会の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

谷口 巧博士

金沢大学医薬保健研究域医学系

(平成三年卒業)

機能回復学教授に就任

平成二十六年五月一日付で、医薬保健研究域医学系 機能回復学(麻酔・蘇生学)の教授を拝命しました。

私は、平成三年に本学を卒業し、村上誠一教授が主宰されていた麻酔科蘇生科に入局しました。麻酔科蘇生科の中でも

原田 憲一博士

金沢大学医薬保健研究域医学系

(平成三年卒業)

形態機能病理学教授に就任



明されつつあります。これからも肝臓病理学という教室の伝統を継承し、また分子細胞病理学(病理学第二)、金沢大学附属病院病理部とともに力強い金沢大学の病理学を築き上げたいと考えています。

最後になりましたが、私は金沢大学出身の医師であり、幸いにも母校の教授として医学教育に従事できる機会をいただきまして大変感謝しております。今後、医学教育および研究、診断を通じて金沢大学の更なる発展に貢献すべく、全力で取り組む所存です。十全同窓会の先生方にはより一層のご指導・鞭撻を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

平成二十六年五月一日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系形態機能病理学(病理学第二)の教授を拝命いたしました。私は平成三年に金沢大学医学部を卒業後、中沼安二前教授が主宰されていた病理学第二講座に大学院生として入局し、現在まで中沼先生のご指導のもと二貫して肝臓病理学の診断・研究に従事してまいりました。また、大学院在学中には米国加州大学Ceslwin教授のもとで免疫学の勉強をさせていただく機会も頂きました。

現在まで私は、原発性胆汁性肝硬変、胆道閉鎖症、IgG4関連硬化性胆管炎、胆管癌を研究対象として、胆管細胞の病態生理について研究を続けてきました。特に、胆管細胞死、胆道系自然免疫、胆管周囲の獲得免疫、上皮間葉移行等を解析し、胆管病変の成り立ちについて解明し、また近年は罹患の性差についても興味を持ち、胆管細胞に対する性ホルモンの役割についても解析しています。胆管は肝臓の中の小器官ではありませんが、多種多様な免疫担当細胞を従え、積極的に多彩な病態を形成する細胞集団であることが明らかとなり、それに伴って胆道系疾患特有の胆管病変の成因・形成機序も解

崔 吉道博士

金沢大学医薬保健研究域医学系

附属病院薬剤部長に就任



平成二十六年五月一日付で、循環医科学専攻医薬情報統御学教授・附属病院薬剤部長を拝命いたしました。よろしくお願ひ申し上げます。私は、平成元年に本学の薬学部を卒業後ただちに大学院に進

救急・集中治療医学に興味を持ち、救急・集中治療に関する基礎・臨床研究を行ってまいりました。平成七年には日本医科大学高度救命救急センターで、平成八年には亀田総合病院救命センターで勤務し、救急・集中治療医学を学び、平成九年からは金沢大学に復職し、附属病院救急部・集中治療部で臨床に従事し、今日に至っております。

研究に関しては、敗血症の病態およびその治療に焦点を絞り、敗血症時に惹起される炎症性サイトカイン変動の解明や敗血症の治療の際に必要な鎮痛・鎮静と敗血症との相互作用、および敗血症性ショックに対する新しい治療法としての血液浄化療法の開発を行ってまいりました。今後は、敗血症だけではなく、様々なショック状態における病態の解明およびその治療法の開発を目指していきま

す。また、その過程で基礎研究から臨床研究に至るグローバルな研究を行い、周術期管理学として若手医師の研究意欲を湧き立たせていく所存です。

臨床に関しては、手術麻酔管理だけではなく、蘇生を含めた術前管理、術後管理(集中治療)も出来る、周術期管理に対するエキスパートの養成に尽くします。周術期管理ができる医師は今後皆様への貢献も増すと考えており、金沢大学の発展に少しでも貢献できればと思っております。

まだまだ若輩の身ですが、体力、バイタリティーには自信をもっております。十全同窓会の諸先生におかれましてはこれまで以上にお声掛けと厳しいご指導を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

学し、生化学教室(大熊勝治教授)で博士(薬学)を取得いたしました。平成六年からの十年間は、製剤学教室(辻彰教授)の助手として薬物体内動態制御やトランスポーターの基礎研究に従事しました。その間、平成九年から二年間は、米国Tutts大学医学部(Urwin M. Arisが教授)のポストドクトラルフェローとして、P-糖タンパク質の肝細胞内トラフィックキング研究の機会も頂きました。平成十六年には助教として、本院薬剤部の元助教の中島恵美共立薬科大学教授の

とで、慶應義塾大学との合併を挟んだ約五年間に胎盤関門研究と薬剤師臨床教育について非常に多くのことを学ばせていただきました。その後、平成二十一年に本学附属病院の薬剤部長宮本謙一教授のもとに准教授として復職し、宮本教授の定年退任後の後任となりました。

臨床では医療の個別化、投与設計の最適化、副作用回避等、重要で未解決な問題が多く存在します。私は、このような問題解決を目指してトランスポーターや代謝酵素を利用した薬物体内動態制御と大学発創薬の基盤研究とともに、基礎と臨床のギャップを双方向から埋めるリハーストランスレーショナル研究を、多くの先生方と連携しつつ推進して行きたいと思っております。もとより浅学菲才の身で

はございますが、本学での教育・研究と附属病院での診療に一層精進し、母校の発展と優れた医療スタッフと研究者の育成に身を捧げる所存です。十全同窓会の諸先生方の温かいご支援を重ねてお願い申し上げます。

伊藤 千裕博士

(平成三年卒業)

東北大学高度教養教育学生支援機構
臨床医学開発室(保健管理センター) 教授に就任



検討を進めていきたいと思っています。今後とも本学卒業生の誇りを持って精進していきますので、十全同窓会諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い致します。

平成二十六年春の褒章

藍綬褒章

小森 貴

(昭和五十四年卒業)



平成二十六年四月一日付で東北大学高度教養教育学生支援機構臨床医学開発室(保健管理センター) 教授を拝命致しました。私は平成三年金沢大学医学部を卒業後、東北大学病院精神科に入局し、二年間の初期臨床研修後、大学院医学系研究科へ進みました。大学院修了後も、文部省在外研究員としてフランス国立保健医学研究所分子薬理学部門への留学を経て、大学院医学系研究科精神神経学分野准教授に至るまで、大学病院精神科での臨床や教育とともに、精神疾患における中枢ヒスタミンの役割についての研究を行ってきました。この度学生のメンタルヘルス支援の充実と強化を目的に、本講座に着任しましたが、青年期後期は精神疾患の発症年齢と重なっており、その役割は非常に重要であると思っています。大学院医学系研究科精神保健学分野教授も兼任しており、引き続き精神疾患の早期発見スクリーニングと新しい治療法の

京 哲博士

(II会員)

島根大学医学部産婦人科学講座教授に就任



平成二十六年四月一日付けで、島根大学医学部産科婦人科学教室の教授を拝命致しました。金沢大学産婦人科には平成七年十月、当時大阪大学産婦人科より留学中のシカゴ、ノースウエスタン大学から直接着任しました。大阪大学ではシニアレジデントとして研究を始め、その面白さにすっかりはまっています。平成五年から上記留学の折、大阪大学時代の上司の井上正樹先生が本学産婦人科教授としてご着任され、助手として呼んで頂いた次第であります。

自分がなぜ呼ばれたのかを考え、研究をベースにして仕事をするスタイルを貫きました。そのコンセプトに共感してくれた優秀な後輩達が、臨床をやりながら研究をするスタイルを守り続けてくれました。臨床医が研究的な頭と心を持って医療に取り組むことが大事なのだという井上前教授の教えは、私の医師としての原点となりました。

平成二十五年六月に藤原浩教授が着任されてから、私の研究への取り組みを全面的にサポートして下さいました。一方で、臨床面でテコ入れして下さいました。婦人科ではまだ十分に浸透していない腹腔鏡下の悪性

腫瘍手術も術者として執刀させて頂きました。手術に関しては、「やらせる」という教育者としての心得をしつかりと教えていただき、これは島根でも早速実践しております。藤原教授とは専門が全く異なりましたが、むしろ専門分野が異なることによる発想の違いが自分にとっては新鮮で新たな着想の起点になりました。

金沢大学での十八年は、井上前教授により研究の心を刷り込まれ、優れた後輩達と同門の先生方の温かい励ましにより継続することができ、足らないところを藤原先生に修正していただき、ようやく自分なりのスタイルを確立することが出来たと思っております。このタイミングで島根に着任したのも縁だと思っております。

島根県では言うまでもなく地域医療が大きな問題となっております。特に周産期医療の現場は中堅、ベテラン医師の高齢化が差し迫った問題となっております。次を支える人材をいかに育成するかは危急の課題であります。金沢で学んだことを島根大学の産婦人科で生かし、そのことが島根県の産婦人科医療の底上げと将来にわたるしつかりとした周産期医療体制の確立に繋がれば、金沢での十八年の意味が一層明確に浮かび上がります。そこそがお世話になった同門の先生方、金沢大学の諸先生方へのご恩返しだと考えております。金沢大学十全同窓会の先生方には今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程お願い申し上げます。

学長職を退任して

中村 信一



十全同窓会の皆様、この度、三月末日を以て、六年の任期を満了し、金沢大学長の職を退任いたしました。学長としての六年間、無事任務を全うできましたのは皆様のご支援・ご協力、そして、叱咤激励のお蔭と、衷心より感謝申し上げます。

平成十六年に国立大学は法人化され、同時に金沢大学においては「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を基本理念とする大学憲章が定められました。また、法人化に伴い学長選考会議が学長候補者を選考することになり、選考にあたり、本学においては、候補者は「所信調書」を提出することと定められました。私は、この新しい方法で選考された最初の学長ということになります。この「大学憲章」と「所信調書」は私にとって行動の立脚するところであり、その中で、林前学長から「学域学類制」を継承、アクションプラン二〇一〇・機能強化プラン二〇一二等を策定・実行して参りました。そして、最終的に、これらの取組の

検証を行うとともに、教育研究力の一層の強化に向けた大学改革構想を本年三月「金沢大学改革基本方針二〇一四」の形で取りまとめました。山崎学長のもと、YAMAZAKIプラン2014として継承されたということではないかと拝察する次第です。

大学の存在理由（レーゾン・デートル）は「知の継承と知の創造」にこそあります。大学という組織もまた、法人化以降、より明確な形で「継承され創造（改革）され」、発展していくのであります。YAMAZAKIプラン2014により金沢大学が大きく発展していきますよう心から願っております。

六年間を振り返りますと、「悔やまれること」ばかり、心に浮かんできません。しかし、同時にこの中から多くを学びました。悔やまれること三つを年代順に述べさせて頂きます。

まずは平成二十年度のグローバルCOEプログラムであります。「海洋堀削がひらく新たな地球への窓―モホール・サイエンスの教育研究拠点形成」はヒアリングまで行つたのですが、残念な結果となりました。次に、平成二十一年度の「グローバル30」であります。十三大学が採択され、本学は一步及ばず悔しい思いを致しました。もう一つは平成二十五年度の「研究大学強化促進事業」であります。これらのことから多くを学習し、国際化

に力を尽くし、外国人留学生を三百五十人から五百人に、さらに、留学生宿舍「先魁」を建設致しました。プロジェクトに關しては「太く尖つたものにする」との重要性を再認識致しました。文科省事業である本年度のスーパースクール大学創成支援事業の採択につながる事を念じています。

医学類・医学部に關連して、最も思い出深いことは二〇一二（平成二十四）年の金沢大学創基百五十年記念式典、および医学部創立百五十年記念式典であります。医学部は五十年前に加賀藩彦三種痘所を淵源と定め、一九六二（昭和三十七）年に創立百周年記念式典を挙行しました。二〇一二年、金沢大学本体もまた、過去の経緯を踏まえ、その淵源を加賀藩彦三種痘所と定め、創基百五十年記念式典を盛大に行い、大学及び医学類・医学部の源泉について新たな認識を持つにいたしました。

最後に、金沢大学の輝かしい未来に思いをはせ、私の思いを述べて頂きます。遠い将来に到来するかもしれない、

過酷な労働の必要もなく衣食住が満たされる時代においても金沢大学は多くの人が集い、「知の継承・知の創造」に満足を見いだす場、「内在的価値としての教育研究」が光輝く大学であるよう願っています。

学問の 実りあれかし 楷新樹

改めまして、皆様から頂きましたご支援・ご協力に感謝と御礼を申し上げ退任のご挨拶とさせていただきます。

追記

学長在任六年間の主な軌跡に關しましては、金沢大学広報誌「アカンサス」二十八号（平成二十六年三月発行）をご覧頂ければ幸いに存じます。



退職のご挨拶

大島 徹



平成二十六年五月三十一日をもって退職いたしました。昭和

五十六年に本学を卒業後、まずは服部信教授が主宰されていた第一内科に大学院生として入り、昭和五十九年から恩師である永野耐造教授の法医学教室に移り、昭和六十一年三月に、ヒト血液型物質の組織・細胞内局在に関する研究で学位を与えて頂きました。大学院の転科は当時としては前例のないことで、大所帯である教室の諸事情に巻き込まれた私を迎えて頂いた永野先生をはじめ、転科を許して頂いた服部先生、また、当時の医学部の指導的立場にあった故本陣良平先生や故 西田尚紀先生には大変お世話になりました。これらの先生方のご理解がなければその後の私はなく、今でも心から感謝しております。

昭和六十年十月に新制度の日本学術振興会特別研究員になり、翌六十一年七月からは助手として採用されました。以後、緻密な解剖手法とその意味、鑑定書の一字一句の表現、法医学鑑定についての大局的な観点など、永野先生から丁寧な指導を受けました。また、昭和六十三年九月から平成元年十月まで、アレキサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員として、旧西ドイツ・ケルン大学法医学研究所に留学し、大勢の知己を得ると同時に、昭和から平成への変

遷と、ベルリンの壁崩壊に象徴される東西冷戦終焉の動きを、リアルタイムで体験しました。帰国後、平成二年十一月に助教となり、同五年四月に科学警察研究所長に栄転された恩師の後を受けて、同年十二月から二十年間、教室を主宰してきました。この間、大学院環境医科学専攻長、医学倫理審査委員会委員・委員長、金沢大学創立五十年記念誌編集委員、医学部創立百五十周年記念事業実行委員、そして、この十全同窓会編集委員・委員長などを務めさせて頂きました。

実務面では、石川県をはじめとして、一部富山・福井両県も含めて千体を超える法医学解剖(司法解剖・行政解剖)や、日本各地の裁判所等からの書類鑑定などを通じて、死因や死亡状況、犯罪性の有無などの法医学的課題に的確に対応したものと自負しております。とりわけ、裁判員裁判制度になつてからの事案も含め、ほとんど全ての刑事裁判で私の鑑定書の結論が尊重された判決が下され、緻密な鑑定を心がけた努力が報われたと感じています。研究面では実務に結びつく研究を心がけ、特に、損傷における生活反応という重要課題を中心に据えて、各種生理活性物質や、同物質に対応するmRNAをターゲットとした分子生物学的研究を展開することで、国際のみにてもこの方面を切り開く先駆的役割を果たせたものと考えています。入学から退職までの三十九年間、山あり谷ありで、ご迷惑をおかけした時期もありましたが、私の法医学鑑定への評価は揺るがず、また、医師会や海上保安本部の活動にも参画でき、教室の果たすべき社会的使命を達成できたものと思っています。

外的要因のみに動かされた改革のための

改革では、将来に悔いを残すことをおそれます。建学の理念と伝統を保持し、病者を癒すという医学の最大目標を達成するため、利に走らず、相互信頼に基づき、信義を重

平成二十六年度
オープンキャンパス

平成二十六年年度の医学類オープンキャンパスが八月七日、八日の二日間にあたり宝町キャンパスで行われました。二日目には激しい雨が降りましたが多くの熱心な参加者があり、参加者数は例年とほぼ同じで二日間で四百八十七名でした。参加者は主には高校一、二年生が中心でしたが、三年生や保護者の方もいらつしゃいました。また北陸三県以外にも関東や新潟などから参加された方も散見されるなど、医学類に対する関心の高さが見受けられました。二日間ともに午前と午後の部に別れて、計四回例年通りのプログラムで行われました。

内容としてはまず、「金沢医科大学時代の教育・研究・診療風景」と題したDVDの鑑賞に始まり、多久和陽医学部長より教育・研究・診療という三つの医学類業務、医学類学生に求められる資質や医師国家試験について説明がなされました。続いて、河崎洋志学生支援委員長から医学類の魅力、教育カリキュラム、学生生活や部活動などについて説明が行われました。

模擬講義では七日には「肝臓のここが肝心」というタイトルで形態機能病理学の原田憲一教授が、八日には「健康長寿を目指す医療のアートとサイエンス」と

んじる教員、職員、学生の良き共同体として、発展し続けることを祈念しております。末筆ながら、十全同窓会皆様のご多幸とご健勝を心からお祈り申し上げます。

いうタイトルで包括的代謝学の篁俊成教授がお話しにられました。身体を中心に位置する肝臓の基本知識、および肥満や糖尿病の食事療法の考え方について分かりやすく講義がなされ好評でした。教室紹介では八日には細胞浸潤学の川尻秀一教授が、九日にはウイルス感染症制御学の市村宏教授が各教室の構成や研究活動について説明されました。基礎研究や臨床診療の重要性、国際的な共同研究などが分かりやすく伝わり、高校生は熱心に聞き入っていました。

その後に行われた教員・在学生との懇



創立百五十周年記念事業の進捗状況

百五十周年記念事業実行委員長・医学類長 多久和 陽

十全同窓会会報第百五十六号の本欄で、山本健前医学類長より、本学医学部創立百五十周年記念事業として当初計画しておりました事業のうち残っている「医学部記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」の二つが、平成二十五年政府補正予算案に盛り込まれて閣議決定されたことが報告されました。約二億円が、本年度国からの予算として記念館とプロムナードの整備に充てられることとなりました。皆さまから賜った募金と十全同窓会からの寄附を合わせた一億円と、国からの二億円を合わせた約三億円が、「記念館の改修工事」＋「メインプロムナードの整備事業」に充当できる資金です。平成二十六年度概算要求には、複数の

大学から本学と同様の施設整備要求が申請されたようですが、文部科学省の施設整備事業、金沢市の医学部・病院前の遊歩道整備事



図1 メインプロムナードの想像図

業、一億円の自己資金による百五十周年記念事業という三位一体の計画が高く評価されたことは間違いありません。これもひとえに、十全同窓会会員各位のお力添えの賜です。

メインプロムナードはこれまでに何度か想像図(図1)をご紹介いたしました。プロムナードは車両を完全に排除した幅広い

車道並木の遊歩道で、歩行者専用道路となります。この遊歩道は、メモリアルプロムナード「医学の道」として、宝町キャンパスのシンボリックな景観となります。プロムナードは十全講堂玄関から市道の方

金沢市で整備される宝町キャンパス敷地境界に沿った遊歩道整備の想像図もご紹介いたします(図2)。既存の樹木を存し、安全性に留意しつつ周囲との調和をはかった整備となる予定です。

来年度の完成予定で計画が進行してお



図2 医学類・病院前の遊歩道整備の想像図

談会には、教育委員会メンバーの尾崎紀之教授、絹谷清剛教授、長瀬啓介教授、八木邦公准教授に加えて現役の医学類学生が加わり、学生募集委員の横田崇教授の司会のもとで参加者へのアンケート結果や参加者からの質問に答える形式で進められました。特に医学類の学生生活、部活や入試についての質問が多くなされました。

全体を通じて金沢大学医学類への関心の高さを感じるオープンキャンパスでした。参加者が金沢大学医学類の研究、教育、診療の魅力について理解し、金沢大学医学類に入学を希望してくれることを願っています。

(医学類学生支援委員長

河崎 洋志 記)

ります。気掛かりな点としまして、東日本大震災復興のために土木工事の職人が東北に集中しており、この一二年の本学の臨床研究棟を初めとする新規工事が軒並み遅れを見たことです。そのうちに東京オリンピックがらみの建設ラッシュが始まるでしょうから、この点が多少懸念されるところです。

山本健前医学類長を引き継ぎ、記念事業が最終段階に入ることをご報告できることを、心から喜んでおります。中村信一前学長をはじめとする金沢大学関係者の皆様、佐藤保前十全同窓会長、十全同窓会会員の皆様に深甚の感謝を申し上げます。創立百五十周年記念事業が有終の美を飾る日を、楽しみに待ちたいと存じます。

物 故 会 員

(平成25年7月1日～平成26年6月30日)

井村 東司三	昭和十五年卒業	松田 春悦	昭和三十二年卒業
大嶋 喜久雄	昭和十六年卒業	久保 正	昭和三十三年卒業
茶谷 士一	昭和十六年卒業	吉沢 潤	昭和三十三年卒業
武藤 邦雄	昭和十九年専卒業	谷口 哲大	昭和三十三年卒業
中川 松雄	昭和二十年卒業	矢ヶ崎 英樹	昭和三十四年卒業
富井 和夫	昭和二十年卒業	毎田 武夫	昭和三十五年卒業
小林 亮一郎	昭和二十一年卒業	梅田 俊彦	昭和三十五年卒業
吉見 万理雄	昭和二十二年卒業	月岡 輝晴	昭和三十六年卒業
磯部 暁	昭和二十二年卒業	岩上 正	昭和三十六年卒業
得田 興夫	昭和二十三年卒業	細川 外喜男	昭和三十七年卒業
富中 和夫	昭和二十三年専卒業	松井 忍	昭和四十五年卒業
加藤 常久	昭和二十四年卒業	加藤 修	昭和四十七年卒業
治村 貞夫	昭和二十四年卒業	宮脇 利男	昭和四十七年卒業
早川 晋	昭和二十四年専卒業	久保 忠	昭和四十八年卒業
小玉 順三	昭和二十四年専卒業	千代 英夫	昭和五十年卒業
平井 健一郎	昭和二十四年専卒業	酒井 知昭	昭和五十年卒業
九谷 修	昭和二十五年卒業	有賀 公則	昭和五十年卒業
杉田 賢一	昭和二十五年専卒業	大島 薫	昭和五十七年卒業
船井 正和	昭和二十五年専卒業	橋本 浩之	昭和六十一年卒業
廣根 孝衛	昭和二十七年卒業	須田 松夫	Ⅱ会員
小林 豊	昭和二十七年卒業	瀬戸 博	Ⅱ会員
岡部 健一郎	昭和二十八年卒業	高野 成子	Ⅱ会員
松本 禮二	昭和二十八年卒業	三谷 昭	Ⅱ会員
高瀬 克忠	昭和二十九年卒業	饗場 博美	Ⅱ会員
坪田 謙	昭和二十九年卒業	濱田 潤一郎	特別会員
小坂 信生	昭和二十九年卒業	田中 重徳	特別会員
三村 孝	昭和三十一年卒業	清水 徹	特別会員
小野木 保	昭和三十一年卒業		
中林 正雄	昭和三十一年卒業		

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
 会員のご不幸は当会にご一報お願いいたします。

総会記事

平成二十六年
十全同窓会総会開催

平成二十六年度の十全同窓会総会が去る七月五日（土）午前十時より、医学部記念館において開催された。今回は、九支部の代表が出席され、参加総数は八十一人であった。まず佐藤保同窓会長よりご挨拶があり、その中で、平成十八年から本年まで八年間の任期中に、会員皆様より賜ったご厚情に対する謝辞が述べられた。続いて議長に佐藤会長を選出し、始めに五十六名の物故会員（前頁一覽）に黙祷を捧げた後、議事に入った。

まず、大井章史理事長代理より平成二十五年度の会務報告が行なわれ、次に金子周一医薬保健学総合研究科長・医学系長より、医学系研究科報告が行なわれた。引き続き第十二回高安賞の贈呈式に移り、最優秀論文賞 PYKO ILYA博士（脳・脊髄機能制御学）、優秀論文賞王喆博士（分子遺伝学）、中川学之博士（がん分子標的医療学）の三氏に表彰状と盾が金子医薬保健学総合研究科長・医学系長より授与された。次いで多久和陽医学類長より医学類報告が行なわれた後、佐藤会長により九支部より出席された各代表の紹介があった。

その後議案審議に移り、大井会計理事から平成二十五年度会計決算報告が、高櫻英輔監事より監査報告がなされた。引き続き大井会計理事より平成二十六年予算案の説明があり、拍手で承認された。次に役員交代の報告がなされた。主なものとして、佐藤会長が顧問、中村信一副会長が会長、理事長には大井会計理事が新任され、谷内江昭宏会計理事の就任が

承認された。その他の役員は、小森貴副会長含め留任となった。

また簗俊成理事、谷口巧理事、原田憲一理事の新任が了承された。次いで、多久和医学類長より医学部正門から十全講堂正面までのプロムナード建設及び記念館の改修・周辺整備は、病院の基幹環境整備、市の遊歩道整備と合わせて近日中に着工予定であることの説明があった。その予算の一部に関しては同窓会から寄附が実行される旨、昨年の総会にて承認されている。続いて医学類学生の課外活動（白山診療班、立山診療班、ACLS金沢、Live Aid KANAZAWA、医学展）グループ代表に支援金目録の贈呈が佐藤会長より行なわれ、閉会となった。

総会に引き続き教授就任講演が午前十一時より行われた。最初に小森日本医師会常任理事の司会のもと、分子移植学（産婦人科）の藤原浩教授が「ヒト胚着床・胎盤形成機構の解明―生命誕生とがん治療の現場から―」と題して講演され、続



いて中村新同窓会長の司会のもと、脳細胞遺伝子学の河崎洋志教授が「脳神経系の形成メカニズムの解明とその医学的応用」を、続いて太田哲生がん医科学専攻長の司会のもと、経血管診療学（放射線科）の浦田敏文教授が「脾臓の画像診断」と題して講演された。若い先生方の最新の研究成果に聴衆一同魅了された。

平成二十五年
決算報告ならびに
平成二十六年
予算について平成二十五年
度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は、名簿改訂後にも拘らず見込みに届きませんでした。支出では、各支部総会への参加、本学総会への参加支部が増えたため旅費が増額しました。補助費は記念館整備が必要とされなかった分減少となりました。予備費からは名簿作業アルバイト代を支出しました。

全体としては会費収入減があり剰金が出なかったため、基金への繰り込みは断念せざるを得ない結果でした。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は、資産運用で得た利息のみです。名簿作成会計では、名簿作成にかかった諸経費を支払い、免除会員の先生方からの賛助、広告料が収入となっています。また、高柳奨学金は、平成二十五年度の奨学生二名に対して支給しました（表2（5）参照）。以上の決算報告に対して高櫻監査

講演会終了後、場所を移し十二時四十分より懇親会が催された。佐藤前会長の挨拶から始まり、次いで福井支部長の竹内桂一先生のご発声による乾杯の後、和やかな内に交歓の会が進行し、各支部代表によるご挨拶及び支部の近況報告もなされ、中村新会長の中締めの後、午後二時盛会裏に閉会した。（大井 章史 記）

平成二十六年
度予算

表6 会費収入は努力目標を計上しました。現実には、ここ数年間会費納入率は五十%に満たない状態です。特に若い世代の納入率低下が著しく、入会率の低下傾向とともに今後最大の課題であります（図1）。支出は例年並とし、学生課外活動や図書館などの課外活動・整備補助、事務費を計上しました。基金への繰込みに関しては会費の収入率が回復し、一般会計が軌道にのるまで調整した額としました。

（会計担当 大井 章史 記）

会計監査報告書

平成25年度 金沢大学医学部十全同窓会会計
金沢大学医学部十全同窓会基金会計
十全同窓会会員名簿作成会計
高柳奨学金会計
金沢大学医学部史会計

上記会計科目報告の収入および支出に關し、帳簿および証拠書類に間違いなく、現在高についても相違ないことを確認した。

平成26年2月20日

監事 中村信一
監事 高柳英輔
監事 高柳英輔

(表1) 平成25年度決算書

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

取入				支出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	2,110,921	2,110,921	平成 25 年度会費 4,000 円× 1764 人	事 業 費	6,016,972	5,033,109	会報・特別号印刷製本代 2,115,855 会報・アカンサス発送代 1,405,774 会費払込用紙・送付用封筒代 312,112 アカンサス印刷代 46,800 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 150,000 学生課外活動支援 (西医体) 300,000 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 260,568 @ 2,772 × 94 本 ホームページ「会員情報変更受付」情報修正 0 ホームページメンテナンス (2 回/年) 0 会報製本代 (No116 ~ No150) 42,000
会 費 取 入	12,192,000	11,484,030	過年度分 353 人 平成 26 年度以降 8 人 準会員会費 6,000 円× 90 人 4,000 円× 4 人	旅 費	1,000,000	1,377,560	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,377,560 会報取材旅費等
雑 取 入	0	19,250	24 年度 SP 研修会 支援金からの返金 19,250	会 議 費	400,000	309,816	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 309,816
				慶 弔 費	100,000	25,320	弔電・生花 25,320
				補 助 費	640,000	519,040	記念館展示室整備 0 図書館医学部分館整備補助 299,040 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 医学展補助 50,000 Live Aid Kanazawa 100,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデイ開催負担金 0
				事 務 費	3,650,000	3,316,985	会費払込料金、EPSON コンピューター式・感熱紙・トナー、 通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 966,985 人件費 2,350,000
				雑 費	60,000	60,000	会報袋詰め作業代 60,000
				支部への補助費	500,000	540,000	11 件 540,000
				基金への繰込み	0	0	0
				予 備 費	1,935,949	145,475	アルバイト謝金 145,475
				繰 越 金		2,286,896	
計	¥14,302,921	¥13,614,201		計	¥14,302,921	¥13,614,201	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	107,316,533				
繰 入 金	0				
利 息	452,048 39,844	外国公社債(シルフリミテッドシリーズ) 利付き国債			
計	107,808,425		計	0	残高 ¥107,808,425

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
繰 越 金	4,993,689		事 務 費	15,560	払込手数料、名簿掲載確認届・依頼文章印刷費
協 賛 金	295,000	免除会員協力	通 信 費	1,683,154	名簿送送料、郵便料、調査費
広 告 料	3,019,800	福田商店	謝 儀 金	0	
			議 費	0	
			名 簿 作 成 費	4,922,400	H24名簿、訂正シール(2回)
計	8,308,489		計	6,621,114	残高 ¥1,687,375

(表4) 高柳奨学会計報告書

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	6,037,408		奨 学 金	450,000	H25年度 奨学生2名 (25,000円/1 ヶ月)
利 息	1,403	定期預金利息			平成25年4月~平成25年12月分
計	6,038,811		計	450,000	残高 ¥5,588,811

(表5) 金沢大学医学部史会会計報告書

自 平成25年 1月 1日
至 平成25年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	3,320,205				
利 息	662	定期預金利息	—	0	
雑 収 入	0				
計	3,320,867		計	0	残高 ¥3,320,867

(表6) 平成26年度予算書 (案)

自 平成26年 1月 1日
至 平成26年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)	科 目	金 額 (円)	摘 要 (円)
前年度繰越金	2,286,896		事 業 費	5,577,705	会報印刷製本代 2,650,000 会報・アカンサス発送代 1,600,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 330,000 会報発送封入作業 年3回 150,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 100,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 222,705 @ 2,205 × 101 本 ホームページメンテナンス (2回/年) 25,000 ホームページ情報更新 (12回/年) 50,000
会 費 収 入	11,592,000	26年度会費 4,000円×1500人 6,000,000 過年度分 4,500,000 平成26年度以降会費 準会員会費 400,000 6,000円×112人 672,000 4000円×5人 20,000	旅 費	1,500,000	各支部総会への出張費、 各県支部長総会招待旅費、会報取材旅費 1,500,000
			会 議 費	450,000	総会、理事会、編集委員会、反省会 450,000
			慶 弔 費	70,000	香典・弔電等 70,000
			補 助 費	640,000	記念館展示室整備 100,000 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 50,000 Live-Aid Kanazawa 100,000 医学展 50,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 ホームカミングデイ開催負担金 20,000
			事 務 費	3,350,000	会費払込料金、プリンター修理・感光体・トナー、通信費、 証明書発行手数料、文具、振込手数料、超過勤務等 1,000,000 人件費 2,350,000
			支部への補助費	600,000	
			基金への繰込み		
			予 備 費	1,691,191	
計	¥13,878,896		計	¥13,878,896	

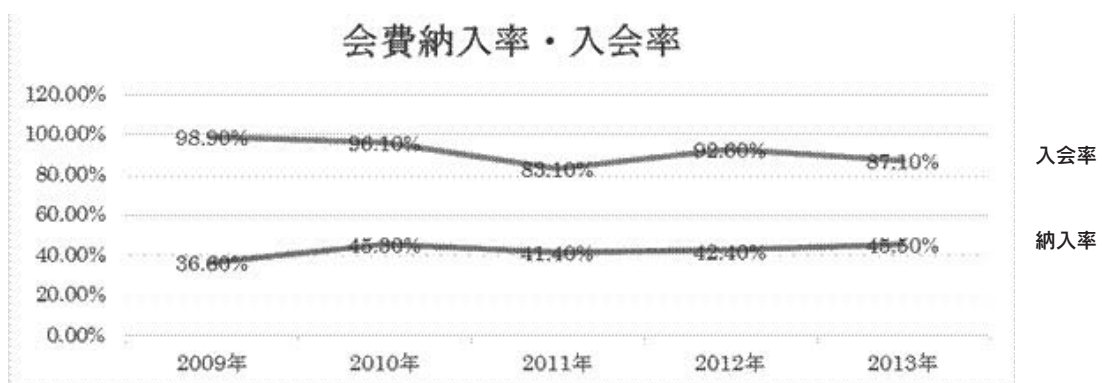


図 1 過去5年間の会費納入率と入会率の推移

教授就任講演

ヒト胚着床・胎盤形成機構の解明 — 生命誕生とがん治療の現場から —

分子移植学 藤原 浩

産婦人科学の最大の特徴は生命の誕生を扱うことである。胎児が出生するまでの過程で、卵巣と子宮は大きく変化するが、その前半を生殖医学が、後半を周産期医学が扱っている。このような生殖現象では卵巣と子宮内で組織と細胞が激しく変化するもののそれらは厳密に制御されている。その制御から外れた典型が悪性化であり、これを婦人科腫瘍学で扱っている。

産婦人科学の臨床の特徴として女性の一生を扱うことが挙げられる。性ステロイド依存性の組織が多く、様々な年代を対象にホルモン療法を行うため生殖内分泌学の深い理解が必要となる。一方で外科的治療も扱っており、婦人科悪性腫瘍として代表的な子宮頸癌は尿管と膀胱神経の間の基靱帯に沿って進展するため、この外科的切除では神経の温存が求められている。そこで骨盤神経温存術式を金沢大学に紹介した。さらに子宮体癌や卵巣癌における傍大動脈リンパ節郭清の方法として、新たにS字結腸側方からのアプローチを金沢大学に導入した。

婦人科学のさらなる課題として悪性疾患に対する内視鏡手術の展開が挙げられる。そこで金沢大学でも昨年十一月より子宮体癌に対する腹腔鏡下手術を開始した。今後はロボット手術も大病院で積極的に展開する必要があるが、安全性を考慮した新しい教育システムとしては、まず開腹手術で後腹膜臓器の解剖を理解

させ、次に腹腔鏡手術で内視鏡視野下での解剖を理解させ、それからロボット手術へ移行するのが適切だと考えている。

一方で、生殖医学では妊卵が子宮内膜に着床しない着床不全が不妊治療の最大の課題となっている。妊娠が成立すると着床した胚からHCGが分泌され黄体は妊娠黄体に移行し、プロゲステロン分泌を継続して胚の着床を維持するとされているが、臨床ではしばしばHCGだけでは説明のつかない症例を経験する。しかしながらこれまでHCG以外の液性因子は同定されず、その機構の詳細は謎のままであった。そこでこの機構を解明する目的でヒト黄体細胞の分化関連分子を同定したところ、ヒト妊娠黄体に免疫細胞との相互作用を媒介する分子が発現していることが明らかとなった。

この発見から妊娠黄体の誘導に免疫細胞も貢献しているのではと発想を転換して検証したところ、従来のHCGによる内分泌機構に加えて、妊娠初期の末梢血免疫細胞も黄体機能を賦活する可能性、および妊娠初期の末梢血免疫細胞は機能を変化し、子宮内膜の分化を促進して胚着床を誘導する可能性が示された。さらに、HCGホルモンが胚シグナルとして免疫細胞にも作用し、糖鎖受容体を介して胚の着床を誘導する可能性を見いだした。これらの知見から、卵管内で透明帯の糖鎖を含む胚からのシグナルを免疫細胞が認識し、その情報をリンパ組織に伝達して、機能を変えた免疫細胞が循環系を介して子宮内膜の分化を誘導するという新しい概念を提言した。

体外受精では免疫系による胚認識機構をスキップしている。これが着床不全の原因の一つであることが推察されたため、患者本人の末梢血免疫細胞を用いた新しい治療法の開発に着手した。その概要は本人のリンパ球をHCGで活性化した後、子宮内腔に投与して内膜の分化を誘導し、その後に胚移植をするというものである。連続四回以上体外受精不成功の症例にこの治療法を試みたところ、妊娠率の向上が見られ、最近では他の施設にても同様な結果が報告されてきており、有望な治療法と期待されている。

周産期学については妊娠高血圧症の病態解明が課題として挙げられるが、そのためには胎盤形成機構の解析が必須である。胚由来の絨毛外栄養膜細胞(EVT)が母体動脈に浸潤することにより絨毛間腔に十分な血流が供給されるが、この過程が障害されると、妊娠高血圧症候群を発症するとされている。しかしながら、EVTの血管内浸潤は霊長類に特異的な現象であり、動物実験が困難なためその詳細は不明なままであった。

このような背景のもと、我々は血管に浸潤するEVTにケモカイン受容体の一つであるCCR1が発現していることを見だし、EVTの浸潤がケモカインによって誘導されることを世界に先駆けて報告した。また母体動脈内に浸潤しているEVTの周囲に血小板が沈着し、活性化して細胞遊走誘導因子を分泌することによりEVTの動脈浸潤をさらに順次誘導するという新しい機序も提言した。

一方で癌細胞より激しいEVTの浸潤は子宮筋層内で停止するが、その機構の詳細も不明なままである。そこで浸潤を停止したEVTについて解析したところインテグリンの機能を制御するCD9が浸潤を停止したEVTに発現しており浸潤能を抑制すること、さらに子宮体癌細胞の浸潤も抑制する可能性が示された。これらの知見から「EVT(癌)の浸潤抑制機構を解明するには停止したEVTに発現している分子の機能がヒントになるのでは」との発想に至り、浸潤を停止したEVTを含んでいる卵膜の絨毛膜(chorion laeve)を免疫源として抗体を作成した。それらの抗原解析を行なった結果、M1-papillaseに属する新規の細胞膜結合型ペプチダーゼを発見することとなった。この酵素はchorion laeveから同定したのでaveirinと名付けたが、霊長類に特異的な新しいペプチド結合配列を有しており、培養実験からEVTの浸潤制御に関与することが推察された。また特記すべき特徴として、発現がHLA-Gと一致して胎盤のEVTに局限していることが示されたため、現在母体の免疫寛容の誘導への関与を想定して研究をすすめている。

これまでの研究で新しい胚シグナルとして透明帯の糖鎖、HCGの糖鎖、aveirinを提案することになったが、免疫系による胚の認識機構の解析は免疫系が同種の非自己を認識し、寛容を誘導する機構の解明に繋がるため胚シグナルとなる糖鎖を含むkey moleculeの同定は臓器移植分野などの他の分野にも貢献すると期待している。今後は、金沢大学においても臨床のみならず、研究の分野でもさらなる展開を目指していきたいと考えている。

脳神経系の形成メカニズムの解明とその医学的応用

脳細胞遺伝子学 河崎 洋志

一. はじめに

高次脳機能の基盤である脳神経系は、我々の身体で最も複雑かつ精巧な臓器である。ヒトの脳神経系には約一千億個もの神経細胞が存在し、シナプスを介して正しく神経回路を形成することにより脳機能を発揮することができる。しかしどのようなメカニズムで発生および発達過程において脳神経系が正しく形成され発達するかという点、および脳神経系の形成異常がどのような病態に結び付くかという点は未だに不明な点が多く、脳神経医学の重要研究課題として残されている。我々はこれまでに以下の三点を念頭におき研究を進めてきた。第一には、正常な脳神経系の形成過程および発達過程の理解である。第二には、正常な形成過程および発達過程に異常が起きた際に見られる病態の理解である。第三には、第一と第二を治療に応用することである。これらを念頭に行ってきた研究内容についてご紹介したい。

二. ES細胞から神経細胞への分化誘導法 (SDIA法) の開発

万能細胞と呼ばれるES細胞（胚性幹細胞、embryonic stem cells）の培養条件を検討したところ、PAG細胞という特殊細胞と共培養すると神経細胞への分化を誘導できることを発見し

た。さらに培養条件を最適化し九〇%以上が神経細胞になる分化誘導法の確立に成功し、SDIA法 (stromal cell-derived inducing activity法) と命名した (Neuron, 2000)。これらの神経細胞には驚くべきことにドーパミン作動性神経細胞が約三〇%も含まれていることがわかった (Neuron, 2000)。この結果はドーパミン作動性神経細胞を世界で初めて試験管内で作成したことを意味している。また網膜色素上皮細胞、運動神経細胞、感覚神経細胞や皮膚細胞などの分化誘導にも成功し、多様な細胞を分化誘導するための「レシピ」を作成した。その後、iPS細胞が作られ、SDIA法を用いてiPS細胞からもドーパミン作動性神経細胞が分化誘導できることが山中伸弥先生から報告された。またドーパミン作動性神経細胞は京都大学iPS研究所の高橋淳先生、網膜色素上皮は理化学研究所発生再生科学総合研究センターの高橋政代先生により臨床応用に向けた取り組みが現在なされており、今後の発展が注目されている。

三. 脳神経回路形成における出生の機能的重要性

「出生」は受精から死に至る哺乳類の生涯で最も劇的な環境変化と言えるが、出生が脳神経系の形成や発達に及ぼす影

響は不明な点が多い。マウスの大脳皮質では体性感覚系の神経回路が出生直後に形成されることから、我々は出生が体性感覚系の神経回路の形成開始スイッチとして働いていると仮説を立てた。マウスを人為的に早産させたところ回路形成時期も早まったことから、我々の仮説が正しいことがわかった。さらに出生と回路形成開始とをつなぐ分子機構を解析し、出生が契機となり脳内の細胞外セロトニン濃度が減少し、その結果として神経回路の形成が開始することを見いだした (Developmental Cell, 2013)。

また新生仔の哺乳行動の発達も出生により制御されていたことから、出生は解剖学的な回路形成のみならず機能的な発達も制御していることがわかった (Molecular Brain, 2014)。さらに視覚神経回路の形成も出生及びセロトニンにより制御されていたことから、我々が見いだした出生による神経回路の形成制御機構は様々な脳部位で使われていると言える (Developmental Cell, 2013)。

著しい早産では発達障害や精神疾患の発症リスクが高まることが知られているが、その病態は不明である。本研究の結果、出生が脳回路形成に重要であることが明らかとなったことから、早産による発症リスクとの関連が興味深い。

四. 高等哺乳動物における脳神経系の遺伝学的解析

現在、脳神経系の分子生物学的解析にはマウスが主に用いられている。しかしマウスの脳はヒトの脳に比べて小さく様々な重要な構築を失っている。そこで我々は分子生物学的な解析が可能

な高等哺乳動物が今後重要になると考え、食肉類哺乳動物フェレットを採用した。フェレット用cDNAマイクロアレイを独自に作成し、視覚神経系で高等哺乳動物に特徴的に存在するP細胞（色彩や形態に関する視覚情報を伝達する細胞）に特異的に発現する遺伝子を初めて同定することに成功した (Cerebral Cortex 2013)。続いて遺伝子機能解析をフェレットで行うために遺伝子操作技術の開発を行った。子宮内電気穿孔法をフェレットで試みた結果、フェレットの大脳皮質神経細胞に効率良く遺伝子導入できる技術の確立に成功した。この結果は、高等哺乳動物における迅速かつ効率よい遺伝子操作が可能になったことを意味している (Molecular Brain, 2012)。

今後は高等哺乳動物に特徴的な脳構築の形成制御機構やその異常が引き起こす疾患病態の解析を行う予定である。

五. 終わりに

これまでの多くの諸先生方の陰日向の温かいご支援とご高導に改めて深く御礼申し上げます。当教室で苦楽をともにしてきた多くのメンバーの多大な努力に感謝致します。平成二十五年に金沢大学に着任させて頂き、研究を推進するための絶好の機会を頂きました。オリジナルな研究と人材育成に努めて参りますので、今後ともご高導を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

膵癌の画像診断

経血管診療学 蒲田 敏文

膵癌の画像診断には超音波（体外式、内視鏡）、ERCP、CT、MRIなどがある。膵癌の術前診断を行う場合には、各検査法の特徴を生かして効率のよい検査方法を確立することが重要である。本講演では主に膵癌診断で多用される造影ダイナミックCTの撮影方法を述べる。次いで、膵癌は発生部位により浸潤する臓器が異なるために、臨床症状や画像所見も異なることを各領域に分けて解説する。

(1)ダイナミックCT撮影法と膵癌のCT所見

膵癌の早期発見や進展度診断にはMDCTを用いた造影ダイナミックCTが必須である。高濃度造影剤（350〜370 I/ml）を急速静注（3〜5 ml/秒）し、早期動脈相（25秒後）、後期相（40秒後）、静脈相（70秒後）、平衡相（180秒後）の少なくとも四相を撮影する必要がある。動脈優位相のデータから3D画像（volume rendering）を作成し、動脈解剖や動脈浸潤の評価を行うことができる。

膵癌は前述の如く線維性間質に富むため、動脈相では正常膵実質より濃染不良であり、低吸収を呈する。静脈相〜平衡相にかけて癌内の線維性間質部に造影剤が停滞するために遅延性に濃染してくる。したがって、平衡相のみを見ると癌

部が周囲正常膵と等濃度となり、腫瘍の同定ができなくなることがある。また逆に、2 cm以下の小膵癌ではダイナミックCTの動脈相では周囲膵実質と等濃度を呈し、腫瘍の検出が困難なことが多い。そのような症例でも平衡相で腫瘍が遅延性に濃染して同定可能となる場合もある。したがって膵癌が疑われる症例のダイナミックCTを読影する場合には、単純CTから造影CTの各相の画像をすべて丹念に観察することが重要である。

膵癌は浸潤性発育を示すので、腫瘍が大きくなると膵管や胆管を閉塞させるだけでなく、膵前面への浸潤（漿膜浸潤）や後面への浸潤（後腹膜浸潤）を示す。腫瘍浸潤部はspicula様の突出や腫瘍から連続する腫瘍状あるいは索状影を呈する。腹腔動脈や脾動脈、総肝動脈、上腸間膜動脈なども浸潤を受けると不整な狭窄を示す。上腸間膜動脈を取り囲むように腫瘍が浸潤すると、造影平衡相では上腸間膜動脈が膨らんだように見えることもある。

(2)膵癌の発生部位による臨床的・画像的特徴について

膵は通常、上腸間膜静脈から門脈移行部の右側を膵頭部、左側を二等分して尾部、尾部の三つに大きく分けられる。膵癌はその発症部位により臨床的・画像診

断的な特徴が異なる。筆者は膵臓を六つの領域に分けて評価している。すなわち、①膵鉤部、②膵頭部、③Groove、④膵頸部、⑤膵体部、⑥膵尾部の六部位である。

各発生部位における膵癌の臨床的・画像的特徴について簡潔に記載する。

①膵鉤部癌…早期では総胆管や主膵管の閉塞がなく、症状の発現が遅く早期発見が困難なことが多い膵癌である。膵外への進展傾向が強く、十二指腸水平脚や上腸間膜動静脈への浸潤（神経叢浸潤）が認められることが多い。膵外進展を主体とする膵鉤部癌は十二指腸癌や腸間膜腫瘍と誤診されることもある。

②膵頭部癌…膵内胆管や主膵管を閉塞させて、黄疸や膵管拡張などを契機に発見されることが多い。進行すれば十二指腸浸潤、上腸間膜動静脈浸潤を伴う。膵内胆管近傍の膵癌と壁外浸潤を伴う胆管癌との鑑別が問題となることもある。

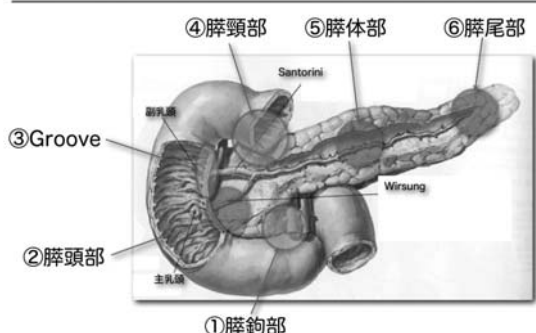
③Groove膵癌…膵頭部と十二指腸下行脚の間の溝（Groove）を主体とした膵癌である。Grooveに沿って上下に索状に進展する特徴がある。主膵管閉塞をきたす前に十二指腸壁や膵内胆管に浸潤する。一見膵頭部が正常に見えるために、十二指腸癌や膵内胆管癌と誤診されることが多い。また、Groove領域に局限した慢性膵炎（Groove pancreatitis）と画像所見が類似する。膵炎と膵癌の鑑別は膵炎ではGroove領域の索状腫瘍内に嚢胞（仮性嚢胞）を認めることが癌の症例より多い。Groove膵癌では十二指腸壁から粘膜まで癌が浸潤すればびらんや潰瘍を形成するので、十二指腸生検で腺癌を証明できる場合がある。

④膵頸部癌…膵外に進展し、腹腔動脈根部〜総肝動脈に浸潤しやすい。肝十二指腸靱帯にそって肝門部に向かって上方へ浸潤することもある。

⑤膵体部癌…脾動脈や脾静脈に浸潤しやすい。脾静脈が閉塞すると胃周囲の静脈（胃大網静脈、胃冠状静脈）が側副路として拡張する。後方の左副腎や大動脈壁あるいは腎動静脈へ浸潤することもある。大網や腹膜への播種の頻度が他部位の膵癌より高い。膵体部癌には嚢胞（貯留嚢胞や仮性嚢胞）の合併頻度が他の領域の膵癌より高い。嚢胞性腫瘍と誤診しないようにする必要がある。

⑥膵尾部癌…脾門部で脾動脈や脾静脈に浸潤する。脾門部浸潤や大腸脾彎曲部への浸潤も見られる。癌が大腸に浸潤すると、臨床的に大腸癌と誤診されることがあるので、注意が必要である。また、膵体部癌と同様に腹膜播種の頻度が高い。

膵癌の発生部位



膵癌は発生部位からは6つの領域にわけると理解しやすい

臨床研究棟（C棟） 竣工記念式典

医学系臨床研究棟（C棟）は、平成二十二年三月の二期工事着工から四年を経て本年三月に二期工事の竣工を迎えました。竣工記念式典が五月十六日、附属病院宝ホールにて開催され、関係者約百三十人が新たな拠点誕生を祝いました。

研究棟は七階建て、延床面積一万四千四百二十六平方メートルで、診療棟の東側に建設され連絡通路でつながっています。この臨床研究棟の竣工により、再開発のための新しい建設は終わり、約三十年に渡る宝町・鶴間地区再開発・金沢大学総合移転事業計画は完了しました。あとは古い建物の撤去が行われ、正面玄関や、プロムナードと駐車場の整備などが残るだけとなりました。

式典では、医学系長の式辞の後、山崎光悦学長の挨拶、中村信一前学長のご謝辞に続き、森喜朗元内閣総理大臣のご祝辞をいただきました。城内からの金沢大学の移転のお話からはじまり、この臨床研究棟の竣工にいたるまでの味わい深い内容で、参加者の多くが感銘を受けました。いかに多くの方のご協力をいただいて、今日を迎えることができたのかと、長年にわたってご貢献をいただきました。

した皆様方に思いを馳せながら拝聴いたしました。続いて、関靖直文部科学省文教施設企



C棟建物



記念式典

画部長、山野之義金沢市長より心あたたまるご祝辞をいただきました。式典終了後は、関係者らが最新の機器が整備されている臨床研究棟内の様子を見学しました。そして、今回の工事費用の一部に充てられた「渡辺基金」の寄附者、故 渡辺治先生の篤志を顕彰して設置されたレリーフ前で記念撮影を行い、改めて完成の喜びをかみしめました。

経済の低迷と少子高齢化などから国力の低下が問題となつています。それを突破する方法のひとつが大学力の強化です。国は大学に改革をせまる施策を次々に打ち出しています。国内の大学は改革を競いながら施設の充実を遂げようとしています。こうしたなかにあつて、本学の再開発では素晴らしい臨床研究棟が認められました。このことは、これまでの諸先輩の皆様が優れた教育と研究を行ってこられたことの証であると思います。新しい充実した施設で研究をさせていただくことができますことに、心より感謝申し上げます。

完成した研究棟を大いに活用させてい

いただき、教育と研究を質、量ともに、より一層充実させ、臨床研究を推進していきたいと思っております。そして、金沢大学憲章の基本理念「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」に従い、世界に通ずる臨床研究の中核拠点に成長していきたいと思っております。

（医学系長 金子 周一 記）

医学類福利施設棟の食堂・ 購買のオープン記念セレモニー

七月八日、金沢大学生生活共同組合の主催による医学類福利施設棟の食堂・購買のリニューアルオープンを記念したセレモニーがあり、大学本部から山崎光悦学長、山本博、柴田正良の両理事、医学類からは井関尚二、医薬保健学域長、金子周一医学系長、多久和陽医学類長を始めとして多数の学生及び教職員、生協関係者が出席した。式典では、金沢大学生協の米山猛理事長の挨拶、山崎学長の来賓挨拶に続き、新装なった食堂と購買の見学や店舗紹介が行なわれた。その後、食堂においてレセプションが行なわれた。

老朽化した医学類福利施設棟の改修は長い間の懸案であったが、政府の平成二十四年度施設整備費補助金を受けて実現することになった。平成二十五年度中に競争入札が行なわれた結果、従来通り金沢大学生協による食堂・購買の運営が決定された。同年秋季からの改修開始に伴い、仮店舗での購買の営業と、弁当販売が行なわれていたが、昨今の事情から工事



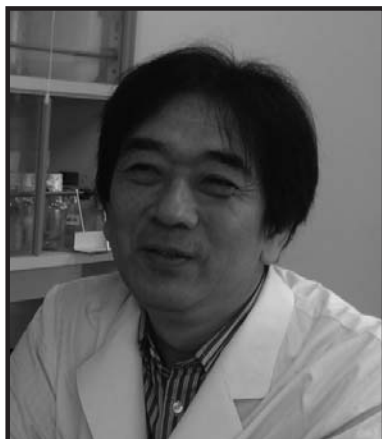
挨拶する山崎光悦学長

の遅れがあつた末、ようやく今回のリニューアルオープンとなった。施設棟全体としてはエレベーターの新設、トイレの拡張改修が行なわれた。一階の食堂はテーブルや椅子が一新され、日替わりメニューの充実、サラダバーの開設、レジの増設、厨房機器のオール電化、昼食時と夕食時二回の営業、閉店時間中のホールの学生フリースペースとしての開放などの改善が見られた。二階の購買は旧店舗より二・五倍の増床となり、通路がゆったりと広くなり、増床部分とバルコニーにはテーブルと椅子を置いた休憩コーナーが設けられた。デザート類を含む食品、国家試験対策本を含む専門書籍及び一般書籍、医学類らしい白衣、聴診器や解剖実習等の教材など、品揃えが一層充実した感がある。朝八時十五分から夜八時までの営業も学生や教職員の利便性を高めている。金沢大学生協は単に福利施設棟のみならず、旅行、出張、留学、ICT、語学試験、国家試験、保険等に関係したサービスもなっている。今回の福利施設のリニューアルオープンにより、宝町キャンパスのアメニティが向上し、学生や教職員の満足感と士気が高まることが期待される。

宝町キャンパスでは、平成二十四年度の医学図書館改修、平成二十五年度から今年度にかけての医学類C棟建設、福利施設棟及びD棟の改修に続き、今後は医学部記念館の改修や正門及びプロムナード、遊歩道の設置が予定されており、数年後の再開発完成が楽しみである。（井関 尚一 記）

清水 徹教授追悼

細菌感染症制御学前教授 前金沢大学長 中村 信一



去る二月二十五日、清水徹先生の訃報に接し、あまりに突然のことに大きな衝撃と悲しみを受けました。当時自分は学長の任にありましたが、本学にとって先生を失くしたことは今もって痛切の極みでございます。

私は、清水先生の恩師である林英生先生とは学会活動を通じて以前からよく存じ上げており、先生から清水先生のお名前をはしばしば伺っておりました。清水先生との出会いのファーストステージは、平成二年、ソウルで開催された第一回韓微生物学シンポジウムでありました。その頃、清水先生は大学院生であり、クロストリジウムの研究。特にウェルシュ菌の毒素遺伝子発現、毒素産生刺激物質サブスタンスAに非常に興味を持っておられました。私は昭

和五十一年にウェルシュ菌の毒素非産生株についての論文を書いており、その菌株についてシンポジウムの際に話をしました。清水先生は、この菌株に非常に関心を示され、私と共同研究を行うこととなりました。先生は、この菌株の毒素遺伝子に変異があることを明らかにされ、共著論文として平成八年に発表されました。その後、清水先生はこの研究をも含め、毒素産生調節機構の解析を発展させられました。平成十四年には、世界で初めてウェルシュ菌の全ゲノム配列を決定され、その情報を用いて、毒素産生刺激物質 サブスタンスAを明らかにし、大学院時代から約二十年持ち続けた疑問を解明されました。

これらの研究成果により、平成九年に日本細菌学会黒屋奨学賞、平成十五年には日本細菌学会小林六造賞を受賞されました。

清水先生との出会いのセカンドステージは、平成十二年、千葉県で開催された第三回クロストリジウムの遺伝学と病原性に関する国際学会、International Conference on the Molecular Biology and Pathogenesis of the Clostridia (ClostPath) でありました。私はこの学会を主催いたしました。筑波大学の林先生とともに清水先生が中心となり運営にあたっていたとき、清水先

生の学会運営に関する優れた能力を実感した次第です。

出会いのサードステージ。私は、清水先生のこれらの業績を高く評価し、平成十五年十月に、金沢大学医学部微生物学教室の助教授として招聘致しました。その翌年、平成十六年、はからずも私が金沢大学理事・副学長を拝命し、清水先生が多くの方々の推薦を受け、私の後任教授として選出されました。理事になる以前に、私が総会長として金沢での開催が決定していた、平成十八年の第七十九回日本細菌学会総会においては、事務局長として総会の運営に尽力していただきました。改めて感謝申し上げます。

清水先生は、金沢大学医学部微生物学教室において、クロストリジウム研究者として三代目の教授でありました。教授に選出された際には、私と、「売り家と唐様で書く三代目」という、川柳のことを話したい、笑い、励まし合ったことを思い出します。しかし、清水先生は、この川柳とは全く逆に、教授就任以降、ウェルシュ菌の毒素産生調節に関する研究を大きく発展させ、世界の二流紙にすばらしい論文を多数発表されました。クロストリジウム研究の最も重要な国際学会である、ClostPathに第一回からすべて参加され、多くの招待講演をされました。先生の研究成果は世界のクロストリジウム研究を常に牽引するものであり、また、多くの海外の研究者と共同研究を進められるとともに親交を深められました。先生の訃報が伝わると、即日、ClostPathの代表者であるオーストラリア・Monash大学 Julian Rood教授から、世界中のクロストリジウム研究者にメールが配信され、そこには、清水先生のクロス

トリジウム学にもたらした大きな功績をたたえる言葉、先生のお人柄を偲ぶ言葉が述べられていました。このことから、清水先生がクロストリジウム研究において世界のリーダーのうちの一人であった、ということが言えるかと思えます。

教育においては、平成十八、二十一年度に学生支援委員長として、平成二十一年、二十五年は修士課程長として、積極的に学生の指導、支援にあたられました。この指導、支援は形式的なものでなく、常に学生と正面から向き合い、時には厳しく熱心に指導されました。温厚な人柄と熱心な指導の結果、「何か困ったことがあれば清水先生のところに行こう」といった習慣が学生の間でできていたようです。部活動は軽音楽部と空手部の顧問を務められました。特に軽音楽部では、自らも音楽を愛し、ギター、キーボード、ドラム等、多くの楽器を演奏されていたことから、謝恩会では学生とバンドで共演されました。また、金沢で始められたクラシックピアノでも学生と共に演奏会を開き披露するなど、音楽を通じても学生との交流を深めました。

このような先生の活動はまさに先生のお人柄を表すものであり、学生との距離が最も近い教授であったといっても過言ではないと思います。また常に気さくに多方面の方々と交流され、誰からも親しまれた教授でありました。

本学の教育研究の発展に先生が残した足跡は大変大きなものです。改めてその功績に本学を代表して心から感謝の意を表したく存じます。

清水先生の安らかなご冥福を心よりお祈り申し上げます。

清水徹先生を偲ぶ会

平成二十六年二月二十五日に急逝された清水徹細菌感染症制御学教授を偲ぶ会が、去る平成二十六年四月二十七日に細菌感染症制御学教室主催で医学部十全講堂にて行われました。教職員、学生、卒業生、ご友人、ピアノ関連の方々等、先生の生前のお人柄を映して、多方面の関係者の方々が全国より出席してくださいました。海外の共同研究者からのメッセージも多く寄せられました。偲ぶ会では、細菌感染症制御学前教授、前金沢大学学長の中村信一先生や組織発達構築学准教授の若山友彦先生等より、清水先生との思い出を話していただきました。それぞれの先生方と清水徹先生との出会いや、先生が研究に真摯に向かわれていたお姿、学生の指導に熱心にあたられたお姿等、先生のお人柄がよく表れた温かいお言葉でした。また、在りし日の清水徹先生のご活躍を紹介した映像が流れました。映像のバックには清水徹先生が自分でピアノ演奏をなさった『花は咲く』が流れ、先生の温かい笑顔、豪快な笑い、時折みせられた厳しい姿、学生一人一人と熱心に向き合う



清水徹教授 追悼

姿、研究に対する真剣な眼差し、国際学会での堂々たる発表、また海外の研究者を驚かせる気さくな人柄、ピアノの発表会でみせる繊細な姿、情熱的な演奏等、一つ一つの姿が参加者の胸の中で蘇り、改めて皆の胸に刻まれたと思います。それと同時に、清水徹先生が筑波大学、金沢大学の教育において残された功績、また、ご専門であった細菌学、特にクロストリジウム研究において残された功績の大きさを感じさせられた会でもあったと思います。献花は、ピアノが大好きだった清水徹先生のために、卒業生の皆川英之先生（平成二十六年卒業）がピアノを演奏し、そのピアノをバックに行われま

した。清水徹先生のご冥福をお祈りするとともに、感謝の気持ちを込めながら参加者全員が献花を行いました。清水徹先生との別れは、あまりにも突然で言葉に表せられないほど悲しい出来事でしたが、この偲ぶ会をきっかけとし、先生との思い出や先生の教えを胸に何事にも妥協せず、それぞれの目標に向かって努力し続けるということを教室員一同、先生にお約束するとともに、先生の残された研究を成し遂げること、立派な医師となることで、先生のこれまでのご指導に對しての恩返しをしていく所存です。

活動に多くの理解を示してくださいました。先生は大変音楽を愛しておられ、学生時代から弾きこなされてきたギターの腕前はピカイチでした。こうして私は、様々な局面で清水先生と関わらせて頂いていましたが、昨年から一年間、清水先生の下でウェルシュ菌の研究に携わっておりました。秋には名古屋、オーストラリアでの学会にご一緒させて頂き、発表の機会まで頂けて本当に素晴らしい経験をさせて頂くことができました。昨年一年間を充実した一年にすることが出来たのもすべて先生のおかげです。感謝してもきれません。

突然の清水先生のご訃報に我々学生一同、驚きと、深い悲しみでいっぱいです。学生を代表して清水先生への哀悼の意を述べさせていただきます。

清水先生との出会いは、私が一年生の時、進級に関する悩みから当時学生支援委員長をされていた清水先生のもとを訪ねたことに始まります。当初私は、清水先生は非常に威厳のある恐い先生であるという噂を耳にしていたのですが、予想とは裏腹に優しい笑顔で親身になって話を聞いてくださり、的確なアドバイスをさせて頂きました。その時、何てフレンドリーな先生なのだろうかと感激したことを覚えています。

それからというもの、清水先生には本当に沢山のことを学ばせて頂きました。細菌学講義では、黒板に丁寧に板書され毎度汗だくになりながら熱弁を振るわれていました。細菌



活を全うし、清水先生が体現されていたような素晴らしい大人に、そして医師になることであると思っています。それが恩返しになるかどうかはわかりませんが、きっと天国の清水先生も私たちのことを見守っていてくださること、信じております。心残りですが、これにてお別れの言葉とさせて頂きま

（医学類五年
蒲田 勇介 記）

受賞

第四十二回医療功労賞受賞

佐々木胃腸科外科医院

佐々木紘昭(昭和四十六年卒業)

都道府県医療功労賞に引き続き中央表彰を、平成二十六年三月十五日に受賞致しました。

この賞は国の内外を問わず厳しい環境の下で、長年にわたり献身的な活動を続けてきた医療関係者に贈られるものと承っております。

今回は国内部門十六名、国外部門一名の十七名(医師十三名、歯科医師一名、看護師二名、助産師一名)が受賞致しました。

当日は帝国ホテルにて表彰式が執り行われ厚生労働大臣賞を授与されました。

第四十二回医療功労賞受賞

高岡市きずな子ども発達支援センター所長

行枝 貴子(昭和六十一年卒業)

平成二十六年一月富山県から推薦された本賞の都道府県賞に引き続き、三月に全国表彰で厚生労働大臣賞を頂戴いたしました。

私は平成十一年に高岡市に新設された障害児療育のための施設の長として、この十五年間主に発達障害の幼児の療育に取り組んできました。

近年発達障害やそのグレーゾーンにある子どもが大変な勢いで増加しており、家庭でも保育園や学校でもその対応に頭を悩ましています。私どもの施設では、こどもを取り巻く社会環境の変化がその一因でもあるとの考えから、子どもの育

式の後祝賀会が催されました。

午後は皇居にて夫婦で天皇皇后両陛下に拝謁の荣誉に浴すると共に天皇陛下より長年の労をねぎらうお言葉を賜りました。

拝謁後は、皇居内の散策を許され受賞者一同喜びの中に春の皇居の風情を愛で乍ら楽しいひと時を過ごしました。

受賞につきましては自医院での診療の外に、民生委員と連携した生活困窮者への対応や、在宅医療体制の構築、住民の健康管理、健康講座、その他市の推進する医療福祉、介護等の分野での幅広い活動が評価されたものと考えております。

この度は身に余る賞を頂きましたが今後はこれを励みに尚一層地域医療の為に尽くしてまいりたいと意を新たにしております。

ちに目を向け、乳幼児期からの心と体の発達、特に年齢に応じた自立の力を育てる支援を目指しています。

特に平成二十四年度以降は、市教育委員会より現職教員を施設の職員の一人として派遣していただき、教員、保育士、訓練士などがチームを組み協力して、学校不応の子どもやそれを指導する学校に対し、訪問支援を行うことに力を注いでいます。

このように、医療・保育・教育を一つの施設で密接に結びつけた独自の発達支援をしているところは全国的にも珍しく、そこが評価されたものと思います。

いずれにしても、発達障害分野に初めて本賞の光が当てられたことは大変うれしく、今後も更に研鑽を重ねて、子ども達が健全に育ち、将来社会人として自立できるよう支援を続けたいと思います。

平成二十五年朝日賞を受賞して

横浜市立大学医学部名誉教授

小阪 憲司(昭和四十年卒業)

平成二十六年一月に平成二十五年「朝日賞」授与式が帝国ホテルで開催されました。受賞の理由は、「レビー

小体型認知症Dementia with Lewy bodies(DLB)」の発見です。「朝日賞」は、学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展に多大の貢献をした個人または団体に贈られ、昭和四年に創設されたもので、受賞者の中には後にノーベル賞や文化勲章を受賞した人も多くいます。学術分野では基礎研究者がほとんどで、私のような臨床家

文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)

恒常性制御学教授

金子 周一(昭和五十七年卒業)

この度、「血液による消化器がん検出方法の研究」で、平成二十六年文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞いたしました。

がんは早期に発見することが重要ですが、がん検診の受診率は長らく低いままです。受診率の向上には、高い検出力をもちながら、患者の負担を軽減し受診しやすい方法を開発することが重要です。

本研究では、血液を調べるだけで、消化器がんの高い感度と特異度で検出できる方法を開発しました。従来法では、血液中に流れている、がんが作り出す異常タンパクを検出するものでした(腫瘍マーカー測定

が受賞したのは初めてで、精神医学や認知症関係では初の受賞です。

DLBの発見は、私が三十歳頃に受け持った二人の患者に基づき、昭和五十一年から平成二年までの私の一連の報告により国際的に知られるようになり、平成七年のイギリスでの国際ワークショップで「dementia with Lewy bodies」と名づけられ、平成八年の論文で臨床診断基準が公表され、国際的に知られるようになり、現在ではアルツハイマー病に次いで二番目に多い認知症と言われています。平成十八年に私が横浜で国際ワークショップを開催して以降、「DLB研究会」や「DLB家族を支える会」を組織し、講演などで啓発活動を行なっています。

法)。しかし、小さながんは作り出すタンパクも少ないため、がんを検出することが難しく、検診における従来の腫瘍マーカー測定の意味は限られたものでした。

本研究は、体内に発生したがんを絶えず監視している免疫機構を利用した技術で、がんが小さくとも、がんを検出して変化する血液中に流れる免疫系の遺伝子を測定しています。本研究により、根治可能な早期の段階で、消化器がんを検出する技術が確立しました。本成果は、広くがん検診に用いられ、国民の健康に寄与するだけでなく、海外を含め医療機器がもたらす経済効果についても寄与することが期待されます。

本研究にご支援いただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後とも微力ながら医学の発展に貢献できれば何よりの幸せです。

日本糖尿病学会

ハーゲドーン賞受賞

金沢大学理事・副学長

山本 博 (昭和五十年卒業)

平成二十六年五月二十二、二十四日に大阪国際会議場を中心に開催された「第五十七回日本糖尿病学会年次学術集会」で、本学理事・副学長の山本博先生にハーゲドーン賞が授与されました。この賞は、インスリン製剤の発明者であるデンマークのハーゲドーンの名前を冠したもので、我が国の糖尿病学研究において国際的貢献を果たし、評価の確立した研究業績を残した研究者を顕彰するもので、日本糖尿病学会では最も名誉ある賞

日本糖尿病学会

リリー賞受賞

脳・肝インターフェースメーシン研究センター教授

井上 啓

平成二十六年五月二十二日付で、第五十七回日本糖尿病学会年次学術総会にて、「中枢神経による肝糖代謝制御の分子基盤の解明」に関し、学会賞リリー賞受賞の栄誉を賜りました。平成十九年より本学で研究をさせていただくなかで、十全同窓会の先生方には格別のご支援、ご指導を頂戴いたしました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。個体糖代謝の動的恒常性を維持することとは生命の存続のために必須であり、その中で、臓器間クロストークの重要性が想定されています。私は、神戸大学と本

です。金沢大学関連では平成五年に岡本宏博士（東北大学顧問）、平成二十一年に小林哲郎博士（山梨大学名誉教授）が受賞されています。山本博先生の受賞理由は、「糖尿病合併症の成因・病態・克服に関する基礎的研究」です。山本博先生は、本学教授に就任後新たに取り組まれた血管生物学研究を基盤に、糖尿病性血管障害の発生機構を糖化反応とその細胞受容体系という観点から解明され、新規病態マーカーの同定と臨床への応用、さらには新しい治療戦略の開発に至る一貫した研究を展開されてきました。教職員一同、これまでの山本博先生の偉業をたたえようと、今後の研究の励みにしていきたいと考えています。

(山本 靖彦 記)

学において、臓器間クロストークによる、特に、中枢神経系と肝臓のクロストークによる糖代謝調節の重要性と分子メカニズムの解明に取り組んでまいりました。臓器間クロストークのメカニズムの解明は、技術的な問題から未だ十分な解明がなされているとは言えず、今後、より一層の検討が必要であると考えています。本学においては、脳・肝インターフェースメーシン研究センターが設置され、臓器連関の研究促進にさまざまなご支援を頂いております。今後、より一層の検討を進めていきたいと思っております。最後に、本学において、様々なお力添えを頂き、本受賞の基盤となる研究への支援をくださいました、山本博先生、金子周一先生に心よりの御礼を申し上げます。

第十回金沢大学

十全医学賞

脳老化・神経病態学

小野賢二郎 (II会員)

この度、フエノール化合物に焦点をあてたアルツハイマー病の予防・治療薬の開発のテーマで、平成二十五年度（第十回）金沢大学十全医学賞を受賞させていただきました。身に余る光栄に存じます。二十世紀初頭に登場したアルツハイマー病 (Alzheimer's disease: AD) は、増加の一途をたどり、今日の超高齢化社会において深刻な問題となっています。ADの病態や治療薬開発に関する研究は精力的に進められていますが、依然、病態の全貌は不明であり、病態成立の中核をなす神経細胞死を抑制できる根本的治療薬はいまだに開発されていません。病理学的特徴としては、アミロイドβ蛋白 (Aβ) から成る老人斑、タウ蛋白から成る神経原線維変化、さらに神経細胞脱落があげられ、なかでも病態生理においては、Aβが異常凝集し、神経細胞を傷害する過程が重要な役割を果たすと考えられており (アミロイド仮説)、この仮説に基づいた予防・治療法の開発が行われています。

我々は、Aβ凝集の試験管モデルを構築し、ADにおける様々な疫学的報告を背景にして、ポリフェノールを中心とした有機化合物が、*in vitro*にてAβ線維形成を抑制するだけでなく、すでに形成されたAβ線維を不安定化させ、細胞毒性を軽減させることを明らかにしました。近年、凝集の間段階であるオリゴマーこそが最も毒性があるとして注目されていますが、我々は、

光誘発架橋法を用いて不安定な可溶性オリゴマーを安定化した状態で分離して抽出することに成功し、二量体、三量体、四量体が単量体に比し、βシート構造の割合が増加し、それに伴い、神経毒性も増加することを明らかにしました。さらに、このモデルを主に用いてワイン関連ポリフェノールが、Aβオリゴマー形成を抑制し、細胞およびシナプスレベルで毒性を軽減させることを明らかにしました。また、我々は、Nuclear Magnetic Resonanceを用いて、ポリフェノールが結合するAβの特定領域を同定しました。

我々は、*in vitro*でのポリフェノール化合物の効果を調べるため、ADモデルマウスを用いて共同研究を行い、ポリフェノールが、脳内のアミロイド沈着だけでなく、可溶性Aβオリゴマーも減少させ、さらに高次脳機能障害も改善することを明らかにしました。

現在、我々は健常者におけるポリフェノールの安全性試験（第一相試験）を行い、安全性を確認し、少数のAD患者におけるプラセボ対照の第二相試験（ランダム化二重盲検）を施行中です。

今回の受賞対象となった一連の研究は、多くの先生方のご協力、ご助言等の支えによって行われました。特に三人の恩師、金沢大学脳老化・神経病態学（神経内科）山田正仁教授、福井大学分子病理学 内本宏延教授、カリフォルニア大学ロサンゼルス校神経学 David B. Teplow教授に深く感謝します。その他、研究を共に遂行して下さった国内外の皆様にも心より感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第十二回 高安賞

高安賞は平成十五年度に本学昭和三十一年卒業の臼井澄先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の二段階で行われ、医学博士課程運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。平成二十六年年度受賞者にはつぎの三名が選ばれた。

最優秀論文賞 PYKOLLYA

脳・脊髄機能制御学（脳神経外科学）

"Glycogen synthase kinase 3 β inhibition sensitizes human glioblastoma cells to temozolomide by affecting O6-methylguanine DNA methyltransferase promoter methylation via c-Myc signaling" (グリコーゲンシンターゼキナーゼ-3 β の阻害によるc-Mycを介したMGMT promoterメチル化促進に起因する膠芽腫細胞のテモゾロミド感受性増強効果)

Carcinogenesis 二〇一三年十月掲載

優秀論文賞 王 喆

分子遺伝学（生化学第二）"APOBEC3 Deaminases Induce Hypermutation in Human Papillomavirus 16 DNA upon Beta Interferon Stimulation"

(APOBEC3デアミナーゼはインターフェロンベータ刺激下でパピローマウイルス16型のゲノムDNAに高頻度変異を導入する) Journal of Virology

二〇一四年一月掲載

優秀論文賞 中川 学之

がん分子標的医療学（腫瘍内科）

"EGFR-TKI resistance due to BIM polymorphism can be circumvented in combination with HDAC inhibition" (BIM遺伝子多型に起因したEGFR-TKI耐性のHDAC阻害剤との併用による克服) Cancer Research 第七十三巻二〇一三年四月掲載

平成二十六年七月五日（土）開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で金子周一 医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

（金子 周一 記）

第十回 黒川良安賞 およびスロイス賞

医王保護者の会の支援に基づき、医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授賞式は、今年で十回目を迎えた。

黒川良安賞は、卒業する学生のうちから選ばれた後藤久典さん、後藤夕輝さん、松下祐紀さんの三名に対して、平成二十六年三月二十二日の学位記授与式の席上で授与された。

またスロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから選ばれた川上遥さん、田邊衣里佳さん、中野晃輔さんの三名に対して、平成二十六年五月二十四日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与された。

（多久和 陽 記）

学会報告等

平成二十六年度十全医学会総会 および学術集会報告

太田 哲生

去る六月二十四日（火）に金沢大学十全講堂において、平成二十六年度十全医学会総会ならびに十全医学会学術集会が開催されました。

総会では、まず庶務担当理事の中村裕之先生による庶務報告、会計担当理事の堀修先生による会計報告、編集担当理事の井関尚一先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。引き続き、平成二十五年年度（第十回）十全医学賞を受賞されました金沢大学附属病院 神経内科臨床准教授の小野賢二郎先生による受賞記念講演が行われ、金沢大学十全医学会雑誌（百二十二巻四号）に掲載された総説「フェノール化合物に焦点をあてたアルツハイマー病の予防・治療の開発」の研究内容が紹介されました。現在激増している認知症のなかでも、いまだその成因が十分解明されておらず治療法も確立されていないアルツハイマー病に対して、フェノール化合物であるミリセチンやロスマリン酸がアミロイド β 蛋白（A β ）の凝集抑制のみならずA β 蛋白凝集の中間段階で認められるオリゴマー形成も効率よく抑制し、細胞毒性だけでなくシナプス毒性も軽減させることを世界に先駆けて発見したことが紹介されました。

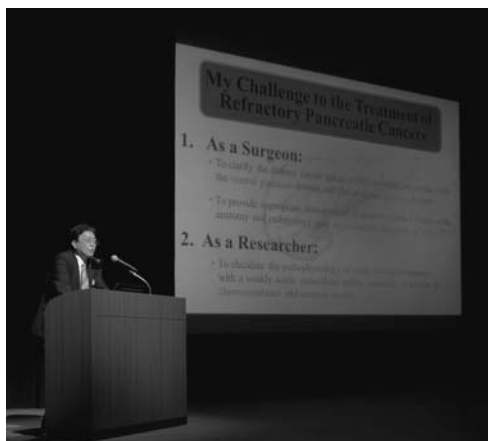
また、本年度の学術集会は、集会担当理事である多久和陽先生、村松正道先生および和田隆志先生のほか、堀修先生、櫻井武先生、尾崎紀之先生にも加わっていただき、そのテーマを「高次脳機能の

最新医学」といたしました。そして、現在内外で八面六臂の活躍を繰り広げられている池谷裕二先生（東京大学大学院薬学系研究科薬品作用学教授、神谷之康先生（ATR脳情報研究所神経情報学研究室室長）、高橋淳先生（京都大学IPS細胞研究所臨床応用研究分野教授）の外部講師の先生方のほか、本学から河崎洋志先生（脳細胞遺伝子学教授）と橋本隆紀先生（脳情報病態学准教授）にも加わっていただき、それぞれの先生方の視点からみた「高次脳機能」についての先駆的な研究成果を教育的にわかりやすく講演していただきました。多久和先生の開会の挨拶から始まり、和田先生の閉会の挨拶まで四時間三十分にも及ぶ長丁場な学術集会となったわけですが、高次脳機能の研究に大変魅力を感じている医学類生や実際に研究に取り組んでおられる若い先生方にとっては大変有意義で珠玉の時間となったのではないかと、企画者の一人として大変喜んでおります。

最後に、なりました。が、本学術集会の開催に向けてご尽力を賜りました関係各位ならびに学術集会に参加していただいた会員の皆様方に心から感謝申し上げます。



第二十三回 日本がん転移学会学術集会・総会 in金沢



本会ががん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床および企業開発（薬剤、機器など）研究を通じて、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献することを目的として設立され、平成四年に「がん転移研究会」として発足し、平成十二年より「日本がん転移学会」と名称変更され現在に至っています。「がん転移」をテーマにした学会としては世界で最大の会員数を維持しており、国際的な基礎研究や臨床応用の状況を把握する目的で、海外のがん研究者と密に連携しています。主要な活動は、年一回の学術集会ですが、国際転移学会からも若手研究者を招聘し、最新の研究を紹介してもらっています。初期の頃は転移のメカニズムや動物実験モデル、臨床・病理における転移の病態の発表が中心でしたが、二十年以上が経過し、種々の薬剤等が開発、試験され、新しい治療

法が手の届くところまできています。

また、本会では、がん転移に関する基礎的・臨床的研究手法の標準化を図るため、これまで、「がんの浸潤・転移研究マニュアル」「続、がんの浸潤・転移研究マニュアル」「がん転移研究の実験手法」「癌転移のメカニズムがよくわかる肝転移のすべて」を研究推進活動の一環として刊行しています。また、学会英文誌、Clinical & Experimental Metastasisを発行しています。

本年七月には第二十三回の当学術集会・総会を金沢市文化ホールおよび金沢ニューグランドホテルにて開催しました。「がん転移を引き起こす微小環境の病態に迫る！」をテーマに掲げ、テーマに沿ってシンポジウム四、ワークショップ四、教育セミナー、ポスターセッション、ランチョンセミナー、イブニングセミナーと多彩な内容に対し活発な討論がなされました。本学術集會会長の太田哲生教授による会長講演では、これまでの常識を覆す新たな視点から、①腫瘍は決して「hypovascular tumor」ではない！②癌間質内において血小板は血管外に遊走し、癌細胞の上皮間葉転換（EMT）や免疫寛容状態を誘導する③癌の微小環境再構築に向けた新規治療法の開発の提案、について発表しました。百九十四題の発表に二日間で三百三十四名の参加がありました。本学術集会・総会開催および運営に多大なご協力・協賛頂いた皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

（伏田 幸夫 記）

金沢大学

関連病院長会議

平成二十六年度金沢大学関連病院長会議が平成二十六年七月五日に宝ホールで開催された。

山田哲司会長（石川県立中央病院）の挨拶の後、議長に川浦幸光理事（小松市民病院）が選出された。

まず、平成二十五年度決算、二十六年度予算が承認された。

次に役員、会員の異動、金沢大学附属病院の人事異動等が報告され、それぞれから自己紹介、簡単な挨拶が行われた。本年度から新たに城北病院（石川県）、上越総合病院（新潟県）が会員に加わり、会員数は八十五となった。

意見交換会では、並木病院長、金子医学系長、多久和医学類長、稲垣保健学系長から、それぞれの現況等について報告が行われた。病院長からは、金沢大学附属病院は北陸の地域医療の要として、関連病院と連携して質の高い医療を提供してきたが、関連病院長会議は情報交換の場として非常に重要であるとの考えが述べられた。また、この関連病院長会議は昭和三十九年にスタートし、丁度半世紀にわたり北陸の医療向上のために切磋琢磨してきたことになり、今回二つの病院が加わり、八十五病院となったことは、他の地域に類をみない大きな連合体となり、更なる連携の重要性が指摘された。少子高齢化社会を迎え、国の施策として病院の機能分化・連携、医療従事者の確保・教育が求められていることから、

山岸診療・臨床教育担当副院長から「新専門医制度に向けての金沢大学附属病院と関連病院の連携」について講演が行われた。さらに、中川原地域医療連携室副室長から「連携診療情報ネットワークによる金沢大学附属病院と関連病院の連携」について講演が行われた。

その後、各県ブロックからの要望、質問に対し、質疑応答が行われた。

主なものとしては、来年度から卒業生が出る地域枠学生の研修、総合診療医の育成、専門医制度に対する対応、常勤医師の高齢化に伴う若手医師派遣の依頼等であり、病院長はじめ担当の役職から説明させていたいただいた。

病院長から以下の感謝の言葉が述べられた。「北陸は、暮らしや教育などのレベルが高いことから、各種調査で最も住みやすい地域に選ばれていますが、医療面でも最も優れた地域に選ばれるよう、関連病院と連携して、地域の住民にベストな医療を提供するよう頑張りたいと存じますので、何卒よろしく願います。」

（並木 幹夫 記）

御遺骨返還式・

合同慰霊祭

平成二十六年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月二十一日（土）午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まり、西尾茂総務課長による開式の辞に引き続き、平成二十五年度の献体者のご芳名が拝誦され、多久和陽医学類長よ

りご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉をご家族の皆様述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長井沢義武様、理事長竹山雅万様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、多久和陽医学類長、医学系と附属病院の教職員、学生が出席して始まりました。名誉会員三十名のご冥福を祈って黙祷をさされた後、祭主の多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、多久和陽医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して森山柁純君（三年生代表）が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学分野教授 尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑が三十四あり、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第百十二回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百六十七名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の

皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、吉崎智一附属病院副病院長、医学系と附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に吉崎智一副病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月九日（水）、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。多久和陽医学類長をはじめとする医学系の教職員多数の方々が参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン（金沢医学所教師）愛児（明治九年〜十年歿）の墓碑にも参拝しました。

（尾崎 紀之 記）



医師会コーナー

金沢大学医薬保健学域医学類

特別講義（一年生対象）

石川県医師会担当の新生入特別講義が、六月三日から七月一日までの毎週火曜日第三限に五行行われた。この特別講義は、新生入の皆さんに医師会の存在意義を知ってもらうことと、現在活躍されている医師のありのままの姿を見てもらうために行われるもので、今年で七年目になる。

今年も最先端の医療に携わっておられる先生方や、医療だけでなく豊かな趣味や強い意思を持って活躍されている先生方からのお話をお聞きした。さらに、医療と言っても臨床だけではなく、公的な仕事に携わっておられる先生方のお話を聞くことができ、さまざまな医師の姿を見ることができ、新生入の将来の進路を考えるための有意義な時間を過ごせたのではないかなと思う。

金沢大学医薬保健学域医学類 特別講義（一年生対象）

六月三日（火）

①日本の医療
石川県医師会会長 近藤 邦夫
②人を診る
小川医院院長 小川 滋彦

六月十日（火）

医療の今
①がん
石川県立中央病院消化器内科 土山 寿志
②心血管カテーテル
金沢循環器病院部長 寺井 英伸
③ロボット手術
金沢大学附属病院泌尿器科助教 角野 佳史

六月十七日（火）

人生を豊かに！（医師は医療のみに生きるにあらず）
①私にとつてのマジック
松原病院副院長 森川 恵一
②音楽のある人生
金沢医療センター 越田 潔
③放射線から子どもを守る
よしだ小児科クリニック院長 吉田 均

六月二十四日（火）

医師会がなくても困らない？（私が医師会にいる理由）
石川県医師会 医師会ビジョン委員会
牧本 和生・洞庭 賢一・佐原 博之・齊藤 典才
西村 元一・菊池 勤・村井 裕・宮内 修
大橋 瑞希・吉川 茜

七月一日（火）

医者アラカルト
①検死に立ち会ふ警察医として―異常死十七万人のお国―
坂戸医院院長 坂戸 俊一
②公衆衛生医師として働くことの魅力
石川県健康福祉部地域医療推進室次長 木村 慎吾
③女性として、医師として生きる
金沢市保健局長 越田 理恵

講義に対するアンケートを参考に、来年以降もこの特別講義が、新生入の将来に役立つものになるよう企画していきたい。最後にお忙しい時間を割いて講義していただいた先生方に感謝いたします。

（牛村 繁記）

第六十六回西日本医科学生総合体育大会を開催

—代表主管校として—

金沢大学医学類長 多久和 陽

第六十六回西医体運営委員長 村 宏樹

八月一日のラグビー競技開始を以て、医学生スポーツの祭典、西日本医科学生総合体育大会（西医体）の熱戦の火ぶたが切られました。本年の西医体は、東海・北陸ブロックの十校が担当校となり、金沢大学が代表主管校を務めました。大会においては全二十競技が開催され、金沢大学は十三競技を主管しました。八月二日にホテル日航において、山崎光悦学長、中村信一全同窓会長、勝田省吾金沢医科大学長（昭和四十六年卒業）、上田博石川県医師会副会長（昭和四十七年卒業）、越田理恵金沢市保健局長（昭和五十八年卒業）をはじめとする来賓、関係者のご出席を賜り、開会式が挙行されました。八月十八日のヨット競技終了まで、十八日間にわたり、日頃の鍛錬によって培った技を競う熱戦が続きました。

西医体は、西日本所在の医学部・医科大学の学生が一堂に会する医学生の最高峰の競技大会です。本年度で第六十六回を数える西医体の源流は、昭和二十四年にさかのぼり



ます。学生の発案により、奈良県立医科大学と和歌山県立医科大学が主管校となつて第一回大会が開催され、七校が参加して七種目の競技が行われました。その後西医体は大きく発展し、今や四十四の大学の一万五千人を超える医学生が集う大きな大会となりました。参加人数は国体に次ぐ規模と聞いております。このような大規模の体育大会を、今日まで学生が主体となつて運営することを伝統として受け継ぎ、成功させてきたことはまことに素晴らしいことです。

金沢大学が主管校として西医体を開催するのは、昭和三十八年の第十五回大会（二十四大学から参加選手三千五百名）、昭和四十八年の第二十五回大会（三十三大学から参加選手七千名）に次いで、三回目となります（それぞれ、十全同窓会報第二十六号、四十九号に関連記事が掲載）。村宏樹運営委員長（医学類四年）を筆頭に運営に携わった学生諸君は、忙しい学業の中、この二年間大会開催に向けて全力で準備に取り組んできました。本大会では、特に年々開催期間中の暑さが厳しくなる中、安全対策に取り組んだ安全対策委員会や、大会の予算規模が拡大する中で予算の執行管理の改善策を理事会で提案した運営委員会の活動など、学生諸君の努力、頑張りには目を見張るものがありました。

最後に、今回の第六十六回の西医体の開催にあたり、ご支援、ご指導いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

第六十六回西日本医科学生総合体育大会運営委員長を務めさせて頂きました、金沢大学医薬保健学域医学類四回生の村宏樹と申します。第六十六回西医体は金沢大学を代表主管校として、八月一日、十八日の日程で開催されました。今年度は台風接近による悪天候にみまわれトラブルが発生する競技も少なからずございましたが、大会役員の皆様、そして選手の皆様のご理解・ご協力のおかげで、大きな事故や熱中症もなく無事に全日程を終了することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

運営委員会のメンバー同士で励まし合い、多くの方のご協力も頂きながら、大会を成功裏に終了させると一つ一つの目標に向かって切磋琢磨できたと思います。まだ全ての運営業務が終了しているわけではありませんが、気を引き締め直して取り組みと共に、来年度以降の西医体の発展に向けて微力ながら尽力したいと考えております。

今大会を開催するにあたって約二年前に運営委員会を発足し、これまで様々な運営業務を行って参りました。金沢大学が代表主管校となるのは五十一年振り（その十年後に東海ブロックが主幹校になった時の担当大学として、開会式と複数の競技をとりおこなった。）とのことで、そのような年に運営委員長という役職を拝命できたのは何か運命的なものを感じます。実際に大会を運営してみると、競技会場の確保に難航したり、各会議の準備や資料作成に苦慮したりと、つらい時期もありました。しかし、そんな時こそ運



議の準備や資料作成に苦慮したりと、つらい時期もありました。しかし、そんな時こそ運

本大会を開催するにあたって、多くの方にご支援・ご協力を頂きました。大会長を務めて頂いた医学類長の多久和先生、理事長を務めて頂いた堀先生、医学類学務課の皆様、保護者会・同窓会の皆様をはじめとした学内の方だけでなく、各大学理事、評議員の皆様、移管先運営委員の皆様、近畿日本ツーリスト、損害保険ジャパンなど、学外の多くの方にもご支援を頂きました。こうした多くの皆様のご協力がなければ本大会を円滑に進行することはできませんでした。ここにお名前をご紹介していない方も多くいらっしゃいますが、皆様のご支援・ご協力に重ね重ね感謝申し上げます。また、来年度以降も変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、西医体が今後ますます発展し、いつの時代でも医学科生にとつての真夏の祭典としてあり続けていくことを祈念致しまして、運営委員長の挨拶とさせて頂きます。本当にありがとうございました。

十全学術行脚 第二十五回

— 富山大学 —



富山大学医学部は、昭和五十年に、新設医科大学の一つとして富山平野を見下ろす呉羽丘陵に創設された「富山医科大学」を前身としています。昭和五十四年には富山医科薬科大学附属病院が設置され、以降、地域の基幹病院としての役割を担っております。創設時より多くの十全同窓会関係の先生方が在籍し、大学や病院の発展にご尽力されてきました。本学の特色は、薬学部や和漢薬研究所（現和漢医薬学総合研究所）との密接な連携であり、東西医学の統合を目標に特色ある教育研究活動が展開されております。平成十七年には、旧富山大学・



高岡短期大学との三大学再編統合が行われ、人文・人間発達・経済・理・工・医・薬・芸術文化の八学部と和漢医薬学総合研究所、附属病院を加えた計十部局を擁する（新）富山大学の杉谷医療系キャンパスとして現在に至っております。

今回の学術行脚では、平成二十六年八月現在在籍中の教授二名、准教授一名、講師一名の十全同窓会関係の先生方に学術内容をご紹介します。

（常山 幸一 記）

一、鈴木道雄教授

神経精神医学（昭和五十九年卒業）



神経精神医学講座は昭和五十四年に遠藤正臣初代教授の下に開設され、昭和六十一年から

ら倉知正佳第二代教授、平成十九年から鈴木が引き継いで現在に至っています。当講座では、開講以来、地域で活躍する良医の育成を使命として努力がなされ、富山県内を中心に活躍する多くの精神科医を輩出してきました。こころの問題が社会問題として注目され、精神疾患が五大疾病のひとつとされる中で、精神科医療は入院から外来へ、病院から地域へ、ケアから先制治療を目指して、という大

きな転換期にあります。これからも、こどもから高齢者まで、それぞれのライフステージにおけるさまざまな精神的問題に対応できる専門家を、バランスよく養成することが重要と考えています。

診療活動は、精神科疾患全般を幅広く対象としていますが、研究面では、前任の倉知教授の時代から、精神医学領域において特に重要な疾患のひとつである、統合失調症の病態生理解明と新たな診断・治療法の開発をテーマに、焦点を絞って進めてきました。これまで、講座全体として、統合失調症とその類縁疾患を対象に、疫学、脳画像、遺伝子、神経薬理、神経生理、神経心理など、新たな観点を取り入れつつアプローチするとともに、独自の統合失調症モデル動物を用いた基礎研究も行ってきました。近年の特徴的な取り組みとしては、精神病発症ハイスルク状態の患者および初発統合失調症患者を対象としたConsultation and Support Service in Toyama (CAST) があります。これは、少しでも早期に適切な医療や支援を提供するための臨床サービスとして、富山県心の健康センターとも連携して行っているものですが、早期診断・早期治療法の開発のための臨床研究のプラットフォームとしても重要です。このような活動からの研究成果も少しずつ出つつありますが、さらに脳画像などのバイオマーカーによる精神病発症予測や治療効果判定、脳病態に則した新規治療法の開発などを推進し、統合失調症などの長期予後改善に結びつけたいと考えています。

学会活動では、現在、日本精神神経学会理事、日本生物学的精神医学会理事、

日本統合失調症学会理事、日本精神保健・予防学会理事などを務めています。平成二十二年にはSST普及協会第十五回学術集会in富山、第十四回日本精神保健・予防学会を主催し、平成二十七年三月には富山市で第三十四回日本社会精神医学会の主催を予定しています。本年十一月に東京で開催される第九回国際早期精神病学会（9th International Conference on Early Psychosis）ではプログラム委員長を務めており、盛会を期待しているところです。

二、稲寺秀邦教授

公衆衛生学（昭和六十年卒業）



公衆衛生学講座は昭和五十三年、札幌医科大学より初代加須屋實教授が着任し開講しました。

当時の講座の主なテーマは疫学、毒性学であり、環境汚染物質の毒性発現機構や予防対策についての研究を展開しました。特にイタイイタイ病やカドミウム環境汚染による健康影響の課題に積極的に取り組みました。

平成十五年より第二代教授として稲寺が着任し、今日にいたっています。講座のメインテーマは環境医学です。環境医学研究では、内部環境・外部環境にかかわらず、主体の恒常性維持機構にチャレンジしてくる様々な健康課題を、疫学的手法・分子生物学的手法を含む現代科学研究のあらゆる技法を駆使し、医学的見地から統合・解析し、最終的に一次予防対策に結びつけることをめざしています。

平成二十三年一月から、全国十五地域で十万人の妊婦さんを三年間にわたって登録し、生まれた子どもが十三歳に達するまで追跡する「子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)」がスタートしました。エコチル調査の目的は、母親のお腹の中にいる時からの環境要因が、子どもの成長や発達、健康状態にどのような影響を与えるかについて明らかにし、環境要因をコントロールすることにより、安全・安心な子育て環境を実現することにあります。未来の子どもたちに、すこやかに育つことができる環境を贈るためのプロジェクトです。私たちの講座は、北陸地方の唯一の拠点として、エコチル調査に携わっています。平成二十六年三月末で、全国で約十万三千組、富山県内では約五千六百組の母子が参加しています。

三、金兼弘和講師

小児科学 (昭和六十一年卒業)



平成七年十月に金沢大学医学部講師の宮脇利男先生が富山医科大学(現富山大学)医学

部小児科の第二代教授となりました。その後米国FDAに留学中の私のもとに宮脇先生から、研究を充実させたいので来て欲しいとの連絡があり、平成九年四月に赴任しました。宮脇先生は富山医科薬科大学に移られてから、原発性免疫不全症(PID)の一つであるX連鎖無ガンマグロブリン血症(XLA)の患者・保因者診断方法をフローサイトメトリーにて行う方法を開発されました。私はフローサイトメトリー

だけでなく、遺伝子解析による診断法を教室内でできるようにセットアップしました。研究費の獲得も順調となり、XLAのみならずさまざまなPIDの患者診断ならびに病態解析が教室内で行われるようになり、数多くの大学院生を育てることができました。平成十四年度から宮脇先生は厚生労働省科学研究費「原発性免疫不全症に関する調査研究班」の主任研究者となり、平成十九年度まで二期六年間務めました。その間に宮脇班長の強力なリーダーシップのもと全国の十三施設が協力して横断的にPIDを研究する体制であるPID-Jが作られました。当教室はPIDの研究では日本におけるトップラボの一つとなり、海外との人的交流も盛んになりました。

一方、私はPIDの研究の傍ら、血液悪性腫瘍の臨床を充実させるべく、診療体制を整えました。非血縁者間の骨髄移植や臍帯血移植もできるようになり、あらゆる難治性の血液免疫疾患の診療を富山大学で行うことができるようになりました。また小児診療におけるトータルケアの必要性を感じ、病棟保育士、院内学級中等部、プレイルームの整備も行ってきました。

宮脇先生と私の夢は地方大学から世界に発信できる研究を行うことでした。これまでPIDを中心に数多くの成果を国内外の雑誌に発表してきました。平成二十五年に宮脇先生が退職の後、教室運営を私に託しましたが、地域医療の充実が富山大学における最優先課題となり、富山医科薬科大学一期生の足立雄一先生が第三代教授となりました。宮脇先生は退職後にがんを発症し、闘病の甲斐なく今年二月に逝去されました。辛い私

は東京医科歯科大学小児科から准教授のお誘いを受け、十月から赴任予定です。宮脇先生の夢をこの富山で繋ぐことはできませんでしたが、かの地でその遺志を継いで、日本から世界に発信できる研究を今後も続けたいと思っていますので、十全同窓会の皆様のご指導ご鞭撻を今後とも宜しくお願い申し上げます。

四、常山幸一准教授

病理診断学 (平成四年卒業)



平成十四年に富山医科薬科大学附属病院に病理部が新設され、助教授が公募されることと

なりました。当時所属しておりました金沢大学第二病理学講座の中沼安二教授の薦めもあり、応募して選任され、同年十月に赴任いたしました。その後、病理診断学講座(旧病理学第一講座)に異動し、現在は准教授として、病理診断、病理学研究、教育に従事しております。病理診断学講座は、開学時に金沢大学第一病理学講座より北川正信教授が着任されて開講された、金沢大学に縁の深い講座です。北川教授は呼吸器病理学やイタイイタイ病のご研究で優れた業績を上げられ、県内外の診断病理学の発展にご尽力されました。県内の病理医には高柳尹立先生を筆頭に十全同窓会関係の先生方も数多く、診断勉強会など相互の交流も非常に活発に行われ、診断病理学のよい研鑽の場となっております。また、富山大学には、現役やOBの十全同窓会関係の

先生方が集うアルプス会という親睦会があり、私も赴任時より仲間に加えて頂いております。アルプス会の先生方は県内の様々な機関でご活躍中であり、富山の医療を支える力強いネットワークとなっております。

研究では金沢時代より継続して、自己免疫性肝疾患やメタボリックシンドローム関連肝疾患を主要テーマとしており、Xenobioticsで誘導される原発性胆汁性肝硬変モデルや、ヒトに近い経過で緩やかに発症進展するメタボリックシンドローム・脂肪性肝炎モデルなど、新たな動物モデルを開発してきました。これらのモデルは病理学的にもヒトに類似した組織像を呈する事が特長であり、病理医としての視点で、病態機序の解明や治療法の開発に取り組んでおります。富山に赴任後は、薬学部や和漢医薬学総合研究所の先生方とともに、和漢薬や天然薬物に関する共同研究も開始しました。最近では、学生を募ってイタイイタイ病勉強会を発足し、学生たちと一緒にイタイイタイ病の病理研究を進めております。平成二十二年からは、留学先であるカリフォルニア大学デービス校、リウマチ、アレルギー、臨床免疫学講座のclinical professorを兼任し、年間五十時間の教育研究指導も行っております。



病院紹介

白山石川医療企業団 公立松任石川中央病院

神三十床)で、一般病床の看護基準は七…
一体制、ICU四床、HCU八床です。
診療実績を二十五年度の数字で例示しま
すと一般病床の平均在院日数一四・六日、
病床利用率九四・九%であり、外来では一
日平均患者数七百十一人で、手術件数は
年間二千件超と増加してきています。

当院は白山市、野々市市、川北町の二市
一町を開設者とし、平成二十年には地方公
営企業法全部適用となり、白山石川企業
団を構成し、その一員として機能していま
す。同企業団には当院の他、公立つるぎ病
院、吉野谷診療所、中宮診療所、白峰診
療所が属しています。地勢的には当院は手
取川扇状地の扇の裾野近くの中心に位置
しており、扇頂には公立つるぎ病院、さら
に手取川の源となる霊峰白山の山麓には三
診療所が位置し、手取川扇状地域に暮ら
す約十七万人の医療圏人口の医療を担って
います。企業団内での機能分化もすすめ
当院の医療機能としては急性期医療に特
化し、さらに健診事業にも力を入れ推進し
ています。行政的な二次医療圏としては金
沢地区と同じ中央医療圏に入っています。

企業団の理念としては住民の期待にこた
えられる良質な医療、安心・安全で信頼さ
れる医療、切れ目のない包括的な医療に努
めることを掲げ、企業団全体として地域完
結型の医療を目指すものです。また当院の
基本方針は「ぬくもりとおもいやり」の医
療の推進であり、患者さんの権利・尊厳を
尊重しつつ、高度医療・救急医療体制の充
実強化を掲げています。さらには医療・保
健・福祉機関との連携を推進し、健診事
業の充実にも力を入れています。

診療の概要としては二十九診療科、病
床数は三百五床(一般二百七十五床、精

近年の主な施設認定、指定を示しますと、
地域医療支援病院(平成二十四年)、災害
拠点病院(平成二十五年)、基幹型初期臨
床研修病院(平成十五年)、石川県地域が
ん診療連携推進病院(平成二十三年)など
があげられます。地域医療支援病院とし
て関連した実績では紹介率五六・一%、逆
紹介率七四・〇%であり、オープン病床利
用率九一・三%であり、救急車搬送台数は
二十五年度千八百五十五台、一日平均五
一台でした。大型医療機器についても近隣
連携医療機関から直接インターネット
予約可能なシステムを構築し、CT、MRI、
PETなど多数共同利用されています。

また、地域医療スタッフが参加できる研修
会、症例検討会も頻回に開催し、地域の医
療、介護、福祉にかかわる皆さんと連携を
密にし地域支援病院としての機能を果た
しています。災害拠点病院としては事業継
続計画BCPに基づいた災害時医療連携マ
ニュアルを策定し、災害訓練にて検証を繰
り返しています。またDMATも一チーム
立ち上げ、二チーム目も組織し研修待ちの
状態です。さらに原子力災害に対応できる
体制も考慮中です。初期臨床研修病院につ
いてはこの制度開始の初年度から認定を受
け、病院全体で若い医療人の育成に取り組
んでいます。特徴としては救急医療に重点
を置き、救急専門医の元でたくさん症例
が経験できるプログラムを作り、また、よ

り快適な環境で研修ができる官舎などのア
メニティーの整備も行っています。当院の
規模を考慮すると数人の定員枠に限定せざる
を得ませんが、この確保もなかなか困難
な現状であり、改善に努力しています。が
ん診療については当院の大きな柱であり年
間がん登録数八百件を超えています。特徴
の一つとしてサイクロトロンを備えたPET
T検査ができることであり、PETセンター
は平成十七年にオープンし、平成二十五
年度腫瘍PETは検診も含め二千百件超でし
た。また平成二十二年には放射線治療(L
INAC)を設備し、一連のがん治療が可
能な体制ができました。拠点病院と連携し
てがん診療の向上を目指し
ていきたいと考えています。

床研究にも積極的に参加しています。
企業団としての取り組みの一つに平成
二十七年開設予定の「福祉棟」建設があ
ります。この施設は当院に隣接し、その中
にはデイサービス、短期入所生活介護施設、
特別養護老人ホームなどの機能が設置され
ます。他の福祉介護機関とも緊密な連携を
図りながら「医療・介護・予防・住まい・生
活支援」が行える体制、すなわち「地域包
括ケアシステム」を構築し、住み慣れた手
取川扇状医療圏で安心して暮らせる「まち
づくり」に貢献してゆきたいと思っています。
今後とも十全同窓会皆様のご支援をお
願い申し上げます。(下部 健記)

公立松任石川中央病院



病院紹介

国家公務員共済組合連合会 舞鶴共済病院

〔沿革〕

舞鶴共済病院は、明治四十年三月、舞鶴海軍工廠職工共済会病院として設立され、専ら海軍工廠の組合員およびその家族の診察に従事していましたが、終戦により海軍省の解体とともに、昭和二十年十月に、財団法人共済協会舞鶴共済病院として一般市民の診療にあたることとなりました。昭和二十五年十二月、旧令特別措置法により共済協会は解散し、病院の運営は非現業共済組合連合会（昭和三十三年に法改正により現名称に変更）の管理病院（旧令病院部）となり、地域の中核医療機関として、百七年間の長い期間に亘って、その役割を果たしています。連合会病院は全国三十四病院あり（その代表的病院は虎の門病院です）、金沢大学の関連病院は当院を含め三病院あります（北陸病院、横浜栄共済病院）。

〔理念・基本方針〕

「当院は患者さんに良質で安心していただける医療を提供します」を理念とし、以下の三点を基本方針としています。すなわち①良質で安全な医療（私達は安全で質の高い医療をめざし患者さんの信頼を得るように全力を尽くします）②患者さんを中心とした医療（私達は患者さんの人格・権利を尊重し十分な説明を行うとともに患者さんの了解のもとに医療をおこないます）③地域との積極的な連携

（私達は地域の医療ニーズに応え地域と密接な連携を大切にいたします）

〔現状〕

舞鶴市を中心に北部京都全体を医療圏とし、十八診療科、三百十床（ICU・CCU十床を含む）の一般病床を有する急性期病院として、医師四十七人をはじめ計五百四十人の職員を有しています。主な病院機能としては、二次救急告知病院、地域周産期母子医療センター、日本医療機能評価機構認定病院（JQA）、BFH（赤ちゃんにやさしい病院）認定施設などがあり、また基幹型臨床研修指定病院として初期研修医を受け入れています。約四年前からDPC対象病院として機能し、昨年から七対一看護体制を導入しています。

また二年前に地域医療支援病院の認定を受け、まさしく地域の基幹病院としてその中心的存在となっています。

〔今後の展望〕

当院の北部京都医療圏の中の基幹病院として高度な急性期医療を担う役割を果たすため、昨年新病棟を竣工しました。特にがん・循環器に対する医療について、疾患別センター化によるトータルな医療の提供を目指しています。循環器については「循環器センター」として京都府から認可されましたので、循環器内科、心臓血管外科が一体となり心疾患医療の拠点として機能できる体制が整いました。がん治療におきましても、「がん診療推進病院」の取得をめざし、地域における外科、消化器内科、泌尿器科、産婦人科、耳鼻咽喉科等の集学的治療（手術、抗がん剤、放射線治療）および緩和ケアを提供することで地域におけるがん治療の中

心的存在となっています。さらに新病棟に放射線治療施設を組み込み稼働に向けて準備中です。その他腎臓・透析機能についても、北部京都最大の透析センターを有し、高度透析医療を一手に担っています（新病棟に拡張した透析センターを整備しました）。また、舞鶴市の周産期機能は当院が周産期医療二次病院として機能しており、年間五百〜六百件の分娩をしています。また今年六月には消化器センターを立ち上げ、消化器内科、消化器外科が外来・病棟ともチームで診療できる体制をとりました。

さらに現在既存病棟・施設の改修中で、救急室の充実・強化など急性期医療に対応した施設になります。「新生」舞鶴共済病院が、すべて完成するのは平成二十七年三月の予定です。

舞鶴市は人口八万五千人の中で公的病院が当院を含め三病院あり（舞鶴医療センター…一般病床二百八十床、舞鶴日赤病院…一般病床百五十床、当院…一般病床三百十床）、今後まさしく地域医療再生のモデル都市となろうとしています。当院は舞鶴地区最大の病床を持つ病院として、医療機能の「選択と集中」「分担と連携」を考慮しながら、前述した体制を中心となって作り上げ舞鶴市民の健康を守っていくこととなります。

そのために医師の確保は最重要課題です。当院の医師は以前は金沢大学から100%

支援を受け派遣して頂きましたが、現在では整形外科、小児科のみとなっています。この紙面をお借りして感謝いたします。

今後金沢大学関連病院として最も西に位置する病院として、金沢大学からの医師派遣は切に要望するところであります。今年七月に舞鶴若狭自動車道が全面開通し、金沢から舞鶴まで高速道路でつながり、大変便利になりました。当院が魅力ある病院として金沢大学から選ばれたる病院となるべく、さらに努力してまいります。

今後ともご指導・鞭撻のほどよろしくお願い致します。（院長 布施 春樹 記）



機能再建学

【沿革】昭和二十八年七月、第一外科学教室の高瀬武平助教が整形外科の講座主任となり、同年十月二十六日に学生に初めて講義が行われ、ここに正式に整形外科講座が開かれました。高瀬助教は昭和二十九年十二月付をもって教授に昇格し、金沢大学整形外科教室として形態を整えました。昭和五十一年六月からは野村進助教が第二代教授に就任し、ライフワークである末梢神経学の研究をもとに神経損傷修復の手術手技の確立、普及に貢献しました。平成元年八月から富田勝郎助教が第三代教授に昇任しました。富田教授は骨悪性腫瘍と脊椎疾患を専門とし、数々の独創的な手術手技を開発しました。中でも「脊椎腫瘍に対する腫瘍脊椎骨全摘術」は国内外から特に高い評価を得ています。平成二十二年三月富田教授は主任教授を定年退職しましたが、病院長に引き続き選出され、平成二十六年三月まで四期八年間病院長を務めました。平成二十二年四月には骨軟部腫瘍、外傷を専門とする土屋弘行准教授が第四代教授に就任し、現在に至っています。土屋教授はこれまでカフエイン併用化学療法や骨移動術による患肢温存手術、液体室素処理骨による再建、凍結免疫療法、ヨードコーティング抗菌金属の開発など次々に画期的な治療法を編み出し成果を上げています。骨軟部腫瘍の臨床、研究に関しては世界屈指の業績を誇ります。

【各グループの活動】当教室では、整形外科すべての領域について網羅したグループ構成（骨軟部腫瘍・骨代謝班、脊椎班、関節外科班、足外科・骨延長・外傷班、末梢神経・手外科班、スポーツ整形外科班、リハビリテーション班）で教育と臨床および基礎研究に励んでいます。

（骨軟部腫瘍・骨代謝）抗がん剤の効果増強を目指した研究をはじめとして、液体室素処理骨の再生と癒合、樹状細胞を用いた免疫療法、蛍光タンパクを用いたがん細胞リアルタイムイメージング、脂肪幹細胞を用いた組織再生などの研究を行っています。液体室素処理骨移植は先進医療にも認定されており、現在では、国内外の多くの施設で施行されています。またヨードを利用した抗菌インプラントの開発および臨床試験を行っています。その有効性は高く、実用化する日も近いと考えています。骨代謝分野では、骨折リスク評価ツールであるFRAXを用いた簡便な骨粗鬆症スクリーニング法の研究を行っています。

（脊椎）富田第三代教授が世界にさがかけて開発した脊椎腫瘍に対する腫瘍脊椎骨全摘術に、凍結免疫を応用して、癌免疫賦活が期待できる根治手術を開発し臨床および基礎の両面から研究しています。また、胸椎後縦韌帯骨化症の新しい手術を開発し、厚生労働省の「後縦韌帯骨化症の病態解

明・治療法開発に関する研究班」に加わって研究しています。さらには脊椎感染症に対するヨード担持インスツルメントの応用、腰痛症に対する新しい器具の開発（特許取得）も行っています。臨床では脊柱変形手術や内視鏡手術を数多く行っています。

（関節外科）大腿骨頭壊死症、新しい人工関節の開発や人工関節のバイオメカニクス、新しいマテリアルの開発に関する研究を行っています。大腿骨頭壊死症では、厚生労働省の特定疾患調査研究班に参加し、骨壊死症に関する再生医療の基礎実験を進めています。人工関節に関しては、抗菌加工の人工関節の開発や、三次元積層造形技術を用いたカスタムメイド人工関節の開発、工学部とコラボした人工関節のバイオメカニクスに関する研究を進行中です。また、人工関節の新しい材質に関する研究を多施設でコンソーシアムを形成し行っています。

（足外科・骨延長・外傷）基礎実験の主なテーマは骨癒合・骨延長の骨成熟の促進です。そのアプローチとして骨折部や骨延長部にBMPやHGFなどの成長因子や脂肪幹細胞を導入し、骨癒合・骨成熟を促進させる生物学的方法や確立共鳴振動を与え促進させる力学的方法を行っています。また、足関節の動的評価や、足疾患における新しい画像診断について臨床研究を行っています。

（末梢神経・手外科）基礎研究では、末梢神経の再生促進を目標とし、幹細胞を用いた



ハイブリッド型の人工神経に関する研究を行っています。また末梢神経の癒着防止を目標とし、我々が考案した神経癒着モデルを用いて、各種薬剤の癒着予防効果について研究しています。臨床研究では、新規のリハビリプログラムの作成を目標とし、手関節のバイオメカニクスに関する多施設共同研究を行っています。

（スポーツ整形外科）膝前十字靭帯損傷、再建術を中心に基礎・臨床研究を行っています。前十字靭帯損傷に関する大規模前向きコホート研究やオリジナル再建術の開発などを手掛けています。基礎研究では、脂肪幹細胞を用いた骨の腱付着部、半月板、軟骨の再生に関して研究しています。

（リハビリテーション）臨床では診療科を問わず急性期リハに欠かせない廃用症候群・フレイル・サルコペニアに長年取り組み、近年はICUにおける強力な呼吸理学療法提供体制作りを目指しています。また、整形外科領域では患肢温存手術後の後療法の質的向上、ROM制限の動的評価、スポーツ障害予防全般に力を入れています。

これまで当教室では厚生労働省から認められた高度・先進医療として「骨軟部腫瘍切除後骨欠損に対する自家液体室素処理骨移植」「超音波骨折治療法」「骨移動術による関節温存型再建」「カフエイン併用化学療法」「脊椎腫瘍に対する腫瘍脊椎骨全摘術」といった数々の画期的治療法を施行し、世界に発信してきました。そして世界最大規模であるアメリカ整形外科学会では、日本で最多の演題数を毎年発表し続けています。

今後とも十全同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻をどうぞ宜しくお願い致します。

（村上 英樹 記）

教室だより

環境生体分子応答学

着任以来、おおよそ二十年が経ち、教室便りに寄稿させて頂くのも三回目となりました。まず真つ先に、先代の橋本和夫名誉教授が平成二十三年四月二十九日にご逝去（享年八十二歳）されたことを、残念ながらご報告しなければなりません。ここに、改めてご冥福をお祈りさせて頂きたいと思います。

医学類の講義（衛生学）は現在、前倒し策により、二学年冬学期に始まり、三学年秋学期2/3位に実習終了、試験という日程になっています。残り1/3は基礎配属実習に充てられており、たちまち次学年を迎えるということで、講義資料の毎年更新に少々手こずっています。基礎配属実習及び六年春学期のクリニカルクラッシュ後期基礎配属実習では、将来海外への進出を視野に入れた学生を中心に多くの学生の参加があり、終日英語で実習を行うことも稀ではありません。また、カリキュラムと離れたところで、希望学生には医学英語の修習、USMLE受験への助力なども行っています。一方、修士・博士課程対象、他学類対象の講義も増加が続いており、講義の負担は、往事をご存知の先生方には、驚かれる程になりつつあります。

研究のテーマは従来どおり、環境の変動と生体の反応及びその遺伝子的背景の解析を主に、分子疫学を中心とする疫学研究を行っています。幸いなことに、多数とは言えないま

でも、修士・博士の両課程に常に学生が在籍しており、個々に細分化されたテーマを追求しています。皮膚及び毛・汗腺などの付属器の分化を規定する或は種々の皮膚科疾患に関連する遺伝子の同定とその制御、骨芽細胞の分化と骨の維持を促進するような外的刺激の分子的背景、環境汚染に曝される魚介類など野生生物に生じる遺伝子変化の同定とそれを利用した生体環境モニターの開発、中枢神経毒性物質の作用機序、作用点の解明と防御機構の解明、遺伝子修飾に基づくホルモン作用の変動と疾患など多彩なテーマに取り組んでくれています。また、分子疫学をはじめとする疫学研究では、ベトナム北部の慢性閉塞性肺疾患の増悪の遺伝的背景、外傷後ストレス障害（PTSD）発症の民族文化的解析、東南アジアにおける結核蔓延の背景因子の解析など国際共同研究や越境大気汚染の健康リスク評価などを行っています。

准教授谷井は、産業界面ではアクリロニトリルベースのプラスチックの熱分解によって発生するアクリロニトリルが、実験動物に行動異常誘発、前庭器の変性、蝸牛のらせん器の変性、角膜の混濁、内側手綱核と縫線正中核でのアポトーシスなどの中枢神経障害を惹起することを示しました。アブラナ科野菜が含有する芥子油配糖体sinigrinの分解産物としてのアクリロニトリルを、我々は日常的に摂取しています。このような低用量繰り返し曝露での代謝過程では親電子物質が生成され、転写因子Nrf2を活性化することによってantioxidant/phase 2 detoxication enzymesを誘導し、毒性を示すこと無く、感作性物質に起因する

炎症反応を軽減することを見いだしました。

助教東は、社会的関心が高まっている黄砂や微小粒子状物質（PM_{2.5}）、多環芳香族炭化水素（PAH）類など越境大気汚染に注目し、公衆衛生学、呼吸器内科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科との共同研究で、健康リスク評価を行い、黄砂によって呼吸器疾患（喘息など）の症状悪化や花粉症などアレルギー疾患が発生するリスクが高まることを明らかにしました。さらに薬学系や理工系の環境毒性学、大気科学との共同研究によって、大気環境中物質による健康リスクの総合的評価に取り組んでいます。

新たに参加した助教出村は、高血圧、心血管疾患と深く関わるレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系について、DNAメチル化変動と遺伝子発現との相互連関について研究しています。その結果、興味深いことに、分化した組織（体細胞）では、DNAメチル化パターンは安定に維持されると考えられてきましたが、遺伝子転写刺激に伴い、標的遺伝子領域のDNAが脱メチル化することを明らかにしました。この脱メチル化は、hour/day/monthのような単位で、ゆっくりと進行します。また、刺激終了後、同じようにゆっくりと元の状態へと戻ります。メチル化の変動は、遺伝子刺激（需要）にตอบสนองして、組織が遺伝子発現を活性化（供給）する、という合理的なシステムと考えられ、転写因子とDNAの結合部位を中心とした領域、即ち、転写刺激により緩んだクロマチンで生じ、変動領域の大きさやその速さは、遺伝子転写の強さに依存するようです。

体細胞のDNAメチル化パターンの変動は一生（受精から死まで）を通じて、様々な刺激により起こり、健康における環境因子の重要性を再認識させて頂きました。

各教員ごとにテーマは異なりますが、環境因子の影響の分子的背景あるいは疫学多岐解析という共通点のもとに今後とも研究、教育、地域貢献を行い、金沢大学及び金沢大学医薬保健研究域の発展に向け努力する所存です。十全同窓会の先生方には、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（西條 清史 記）



【支部だより】

愛知支部

平成二十六年六月二十一日(土)、例年同様名鉄グランドホテル北京宮廷料理「瀟梅舫」にて、第二十八回金沢大学医学部十全同窓会の愛知県支部総会が開催されました。

冒頭、当日講演をお願いしていた関西医科大学附属滝井病院心臓血管外科教授の高味良行先生(平成元年卒業)がお見えにならないことを報告しなければなりません。当日正午過ぎより緊急手術のために手術室に入られたとのことでした。

今回は名古屋地区担当ということで地区副支部長の水上哲秀先生(昭和四十七年卒



業)から開会の言葉があり、その後支部長の尾山淳先生(昭和四十三年卒業)よりご挨拶をいただきました。次に幹事の篠田雅幸先生(昭和五十一年卒業)より会計報告、監事の横田徳久先生(昭和三十三年卒業)より監査報告がありました。

さて、今回の協議事項では役員の改選がありました。今回をもって尾山淳先生が支部長を退かれ、監事に就任、そして新支部長に尾張地区副支部長の吉尾豪先生(昭和四十五年卒業)が就任されました。これからもよろしく願います。

今回の近況報告には金沢大学前学長の中村信一先生をお迎えしました。はじめは現在の医学部の体制、新任および選考中の教授についてお話ししていただきましたが、あとにはやはり学長任期中の金沢大学創基百五十年記念事業や、日本人学生の留学支援だけでなく外国人学生への支援など、学長らしいグローバルな視点で大学運営への熱い想いなどを語っていただきました。大学の内在的価値と手段的価値についてのくだりは金沢大学のさらなる発展を強く期待したもので感動的なものでした。途中プロジェクトの調子が悪くスライドの進行が何度も停止してしまい申し訳ありませんでした。

記念写真の撮影の後、懇親会が去年と同じく後藤玄夫先生(昭和二十四年卒業)の乾杯の音頭とともに始まりました。

宴もたけなわのころ、なんと本日講演予定であった高味先生がサブライズのごとく登場となりました。無事手術を終え、すぐにこちらに向かわれたそうです。もともと当支部の幹事であった気安さもあり、今回は緊急手術のあとでお疲れでしょうから次回にしましうとの言葉もありましたが、金沢から名古屋、そして大阪へ心臓外科医と

しての修業」という演題でマイク片手にお話していただきました。人工心肺で使う文字通り心臓部ともいえる京セラのジャイロポンプの開発に従事つてすごいですね。お忙しい中わざわざ来ていただいたありがとうございます。

そして最後は今年最年少の小川憲人先生(平成二十六年卒業)の音頭で全員による万歳三唱が行われ、幹事で新婚はやよの近藤(旧姓工野)玲美先生(平成二十年卒業)による閉会の言葉で閉会となりました。

今回は前年の三十七名を上回り四十二名の出席がありました。次回は新支部長の吉尾豪先生のもとでの初めての総会となります。さらに大勢の先生方の参加を期待しています。

(篠田 雅幸 記)

滋賀支部

平成二十六年度十全同窓会滋賀支部会が、六月八日近江八幡市料亭宮前で開催されました。(滋賀支部では毎年六月第二日曜



を当てております) 本部からは、中村信一會長(前学長)にご出席いただきました。

今年はいつても出席の先生方で欠席された方が数名おられ、人数はいつもより少ない十六名でしたが、一年ぶりに先生方のお顔を拝見して嬉しいことでした。

まず、物故会員 西川和夫先生(昭和二十九年卒業) 九谷修先生(昭和二十五年卒業)への黙とう、支部長浅野先生よりご挨拶滋賀支部会の現況などのお話があり、会計報告に続いて、中村先生より平成二十六年三月二十六日にされました最終講義に基づいた講話をしていただきました。先生の学問への情熱と、金沢大学への愛情の深さに一同感銘を受け大拍手で終わりました。正午からは白石先生の乾杯の挨拶で宴会となり美味しくボリュームある料理にアルコールも十分入って盛り上がり三時に終宴となりました。

参加者

本部より中村信一先生(昭和四十三年卒業) 奥様以下敬称略 白石制(昭和四十一年卒業) 浅野定弘(昭和四十二年卒業) 三宅隆(昭和四十三年卒業) 朝日晋(昭和四十五年卒業) 山本明(昭和四十六年卒業) 真下六郎(昭和四十六年卒業) 上島弘嗣(昭和四十六年卒業) 安田和弘(昭和四十八年卒業) 安田美代子(昭和四十九年卒業) 桑原正喜(昭和四十九年卒業) 多賀俊明(昭和五十二年卒業) 梶田昌之助(昭和五十二年卒業) 伊藤誠(昭和五十四年卒業) 三浦克之(昭和六十二年卒業) (朝日 晋 記)

千葉支部

去る七月五日に、十全同窓会千葉支部総会(納涼会)が、千葉そごう内、「美濃吉」で開催されました。

若手の先生方もたくさん参加され、総勢十九名の会です。

千葉支部の支部長である生水真紀夫先生（千葉大学医学部生殖機能病態学産婦人科教授）の挨拶と乾杯で会が始まり、同窓会の人との繋がりを広げられる、大切な場になりうるし、今後もそのようにして欲しいとのことのお話で、会の開始となりました。

参加者は以下の如く（敬称略）です。

井上雄元（昭和三十三年卒業）、鎌田栄（昭和五十二年卒業、波多野等（昭和五十二年卒業、高原信敬（昭和五十二年卒業、生水真紀夫（昭和五十六年卒業）、成山昌夫（昭和六十年卒業）、高橋敬一（昭和六十年卒業、松本尚（昭和六十二年卒業、水野谷智（平成元年卒業）、矢形寛（平成二年卒業、石井源一郎（平成二年卒業、佐野剛一（平成三年卒業、大塚祐司（平成四年卒業）、伊藤龍（平成六年卒業）、安松比呂志（平成十七年卒業、田中教久（平成十九年卒業）、秋山文秀（平成二十三年卒業、菅原大輔（平成二十六年卒業、基（台）蔵綾霞（平成二十六年卒業）

井上雄元先生は千葉県医師会長の重責を全うされました。ありがとうございます。

した。第二種兼業農家の鎌田栄先生は今後も引き続き千葉県医師会理事でご活躍の予定です。生水真紀夫先生には十全同窓会千葉支部会長の重責を担って頂いております。高橋が幹事で



る限り、たぶん他に耐えられる方はいらっしゃらないと思いますので、今後ともがんばって頂く予定です。松本尚先生は、千葉北総病院救命救急センター教授として活躍なさっております。ドクターヘリなどでテレビでも何度か取り上げられている非常にエキサイティングな職場のようですが、千葉県の救急医療を支えて下さっています。矢形寛先生は、七月三日のテレビ朝日『ママが生きた証』の医師役のモデルだったそうです。芸能人と知り合いになった場合には、まずは幹事にも連絡するようお願いしております。佐野剛一先生は、新しく開設された東千葉メディカルセンター、循環器内科臨床教授として勤務の毎日で、医療過疎地とされる千葉県東部の救急医療を支えて下さっています。今回は新卒の先生方の参加も得て、いつも以上に非常に賑やかで楽しい会でした。

皆さんご自身のフィールドで本当にかんばっていらっしゃいます。私はいつもパワーを頂いていますが、今後もパワーを与え合える会を目指していきます。

（高橋 敬一 記）

関東拡大支部

十全同窓会の関東エリア（千葉、埼玉、神奈川、東京）の支部が一同に参集しておこなうことになって四回目、平成二十六年拡大支部合同総会が、八月九日に、昨年同様の神宮球場近くの明治記念館二階「富士の間」で開催された。今回の合同総会も、千葉支部長生水真紀夫先生、神奈川支部長島利夫先生、埼玉支部長瀬戸幹人先生のご協力、ご尽力の賜物であることを冒頭に述べたい。

これまでながらく銀座のど真ん中である「銀座ライオン」のクラシックホールで、それこそ「クラシック」に関東支部総会を開催していたのであるが、昨年、神宮球場近くの元赤坂の東宮御所に近い結婚式場として有名な「明治記念館」で開催している。本年の九日は、お日柄が佳いよう、多くの結婚式があり、にぎにぎしい明治記念館であった。昨年より広い舞台のある富士の間での開催となった。

内潟の開会の挨拶後、本年七月から十全同窓会会長に就任された中村信一先生に金沢大学医学部十全同窓会本部の近況報告をお聞きした。金沢大学のミツシヨ、疾患の特異性、そして社会のニーズから、できあがった金沢大学の目玉ともいえる脳・肝臓・心臓・フェース・メディスン研究センター（センター長櫻井武教授）のこと、革新予防医科学共同大学院の設置のことを中心に、金沢大学医学部の発展的ベクトルの方向性を示していただいた。壮大な構想とともに着実に具現化していることに、参加した会員は母校の力強さを感じたことと思う。

会長近況報告後に、本年は、日本医師会常任理事 小森貴先生（小森耳鼻咽喉科医院院長、昭和五十四年卒業）に「明日の医療を創る」と題した講演をいただいた。小森先生は石川県医師会会長の任期中におこった能登地震では医療面の陣頭指揮をされ、今度は日本医師会の役員として東日本大震災に当たられたことをお話しされた。この現実から未来へのお話となり、近未来の日本の予想される有り様をお話された。人口減とともにいかに医療が変化するかをお聞きし、日々のことに追われてあくせくしている身に

は、そういうことになるのかと驚愕のお話であった。参加した会員全員、金沢大学医学部を卒業したことを誇りに思い、育つていく豊富な人材に、胸を張ったことと思う。

島利夫神奈川支部長の乾杯のご発声とともに、懇親会となった。各支部長のご挨拶とともに、大先輩の先生方、遠方からの先生、そして、昨年ならびに本年卒



クラス会

三九会卒業後五十周年同窓会
(昭和三十九年卒業)

五月十七日(土)、ホテル日航金沢で昭和三十九年卒業後五十周年の同窓会が盛大に開催された。

午後六時から賑やかに記念撮影(写真)を行い、会場の「ルミエール」に入ると石川県立音楽堂から派遣された「金沢チェンバーアンサンブル」による弦楽合奏が始まり、まず歓迎の音楽でモーツァルトの弦楽のためのセレナード、アイネ・クライネ・ナハトムジーク等が演奏された。

同級生のうち十三名の級友が他界されたので、会場のスクリーンに物故者となられたお名前が映し出されると出席者全員が起立し、追悼演奏が行われました。有名な「カ

ヴァレリア・ルスティカーナ」間奏曲の静かで慰められるような音楽に耳を傾けながら、今は亡き級友を偲び冥福を祈りました。

七時ころ浅妻茂章君の幹事代表挨拶で開宴した。遠来の中島良明君による乾杯になったところで、それまでの西洋音楽でやかましきまった雰囲気はほぐれ、堰を切ったように会は盛り上がった。昨年

から今年にかけて、栄えある叙勲を受けた級友が五名あり、うち東北大学の岡本宏君は所用で来られなかったが、四名が出席した。稲坂暢君は加賀市医師会長および石川県医師会理事、黒崎正夫君は富山市立病院長、松田尚武君は福井県医師会長および日本医師会理事、山本達君は金沢医科大学学長を、それぞれ長く勤め医療や医学の発展に寄与されたもので、各々のスピーチを聴きながら人生の長きを思いつつ皆で祝った。

ついで、一級先輩の渡辺幸夫先生が創られた「学生時代を回顧して」と題するソフト等を拝借したのを元にして、有川君が作成したパワーポイントによるスライドショーが始まった。五十年前のこのとは忘却の彼方、思い出すことは少ないが、スライドを見ながら、階段教室で本陣教授や山田教授から解剖学講義を聞いたこと、解剖実習で厳肅な気持ちになり、医学生になった実感が湧いたこと、ポリクリで新鮮な気持ちで臨床医学を学んだこと等が脳裏に蘇った。

三嶋勉君のスピーチに続いて、九時ころ三輪晃一君の中締め挨拶があり、さらに次回幹事を引き受けてくれた松田君の挨拶があった。ついで、二次会に移ったが互いの近況、健康のこと、医療のこと、生き甲斐のことなど話は尽きず、十

時頃、ホテル側から催促があった。明

日もあるの



翌朝九時前、二十六人が貸し切りバスに乗り、医学部史跡ツアーに出発した。二日間とも快晴で輝く新緑の樹間をそよ風が渡り、天気までも我々を祝福しているように思えた。専門集団のバスツアーなのでバスガイドは頼りにならず、このツアーを企画してくれた馬淵宏君がガイドの役割をしてくれ、その案内は皆を感じさせた。

まず、教養部の頃を過ごした金沢城公園に入り、懐かしき往時を偲んでから、いもり坂を下り四校記念館を見学した。ついで旧金沢医学館を見学した(写真)。許可が得られていて、初めて玄関から中まで入ることが出来た。またバスに乗って医学部キャンパスに入った。医学部内は、医学部総務副課長の山本様が日曜日にもかかわらず案内頂き、写真も撮って下さった。山本様や図書館の佐藤様(後述)に心から感謝致します。稲坂暢君の祖父も交じる医学一期生群像(写真)や臼井澄君の寄附によって建立された金沢医科大学初代学長高安右人胸像を見学した。

それから新築された医学部図書館を



業の若手の先生から、近況をお話してもらった。奈良県支部から木村先生、山梨県支部長田邊先生にも参加いただいた。まだ本学在学中の六年生医学生一人が飛び入り参加となった。

本年の参加者は七十名であった。本年も、卒業年二〇〇〇年以降の会員が全体の十三%を占める。金沢大学医学部卒業で関東圏で研修している会員には、もつと参加していただきたいところである。アナウンスの周知がうまくいかないのか、住所変更されてしまうのか、はたまた多忙でそれどころではないという心境からか、なかなか参加人数が思うように増えない。

前期研修医の参加は無料である。多くの先輩とお話でき、関東におけるネットワークを構築でき、有益な情報を得ることはまちがいない。是非、来年は参加してほしい。

一昨年から続く埼玉支部長瀬戸先生のギター演奏は本年はなしとなった。来年は瀬戸先生が参加されるので、ギター演奏は再開である。

来年の再会を期して、夜八時に閉会となった。

なお、来年は八月一日(第一土曜日)、明治記念館で開催する。是非、参加してほしい。連絡は内潟まで uchigata@dmc.twmu.ac.jp

(内潟 安子 記)



見学した。

コーヒープ
レイクで喉
を潤してか
ら、図書館
の佐藤様が
明くてITに
も十分
対応する図
書館の全容
を説明さ
れ、普段は
誰も入れな
い、貴重な
古書が収め
られた書庫
へも案内し
てくださった。
幾つかのカ
ン
ファレンス
室や講義室
もあり、昔
もこんな
に立派な図
書館だった
ら、もっと
勉強した
りした。医
学部記念館
や病院内の
宝ホー
ルを見学し
て昼となり
、この三九
会の
締めくくり
となる料亭
つる幸へと
向かった。
長距離を歩
いた疲れと
空腹と喉の
渇
きをいやし
ながら、ゆ
っくりと飲
み、休憩し
てから、次
は福井での
再会を約束
して
金沢駅での
散会となつ
た。



三度目の同窓会

(昭和五十八年卒業)

昭和五十八年金沢大学医学部卒業の同窓会は、卒業後概ね十年ごとに過去二回行って参りました。そして本来なら昨年が卒業三十年の節目でありましたが、一年遅れの本年八月二日(土)～三日(日)に、金沢市の奥座敷犀川温泉郷にある「滝亭」で行われました。

まず本年二月、発起人…土屋、蒲田、幹事長…藤村、幹事…土屋(高松)、越田(宮崎)という布陣で作戦会議を開き、開催日と場所を決め、できるだけ多くの同窓生に「予定を空けておくように!」と伝えるところから始まりました。過去二回は夏の開催でしたので、それを踏襲し発起人/幹事団の空いている週末を設定し、場所は数年前の増改築で生まれ変わった「滝亭の新館離れ犀川」に決めました。離れは本館から完全に独立しており、全ての部屋に犀川を見下ろす露天風呂が設置されており、離れの宿泊客専用のラウンジもあること故、よりゆとりと親密な宵の宴が楽しめること考え、十室全てを予約しました。ファーストアナウンスから遅れること三か月後の五月下旬に同窓生百二十名に旅館のパンフレットを添えた案内状を送付致しました。

同窓会に先立ち、特に金沢を離れて久しい遠方からの参加者のために、新しくなった病院ツアーを企画しました。開宴三時間前に大学病院に集合し、蒲田氏と藤村氏のガイドの下、十二名の参加者が病棟、外来棟などを見学しました。

同窓会には、計四十六名の同窓生のご出席がありました。一番遠方からのご参

加は台北市の黄氏で、北陸近隣地域だけではなく、全国からお集まりでした。一年後だったら、東京・金沢二時間半の距離故、もう少し便利だったかもしれないですね。開宴に先立ち前回の同窓会以降にお亡くなりになられた坂田和之氏を偲び、全員で黙祷を行いました。発起人代表の土屋氏の挨拶の後、形式張った堅くするしいセレモニーは一切なく、自由な歓談の花があちこちで咲いて参りました。おじいちゃん数名、還暦を迎えた方も数名。見違える程変わった(Or若返った)方々、何にも変わらない方々…。

あちこちで、「おおー!」「わあー!」「ええー!」と盛り上がりつつあったところ、ひとり一言ずつの近況報告と相成りました。「夜間も現場に出て現状を把握しないと陣頭指揮がとれない」と変則勤務を続けている現役バリバリの救急医。医療スタッフの確保に奔走している病院長の皆さん。「僕たち教員免許もないのに!」とおつしやりながらも学生教育にご尽力の大学教員陣。生活圏域僅か数一〇〇mながらも地域密着の頼れるクリニック医の皆さん。「こんな事くらいで落ち込んだりへこたれたりしないで欲しいよなあ」とちょっぴり遅しさに欠ける後輩諸氏を嘆く診療部長の皆さん。長時間オレ、或いは短時間勝負のオレもバリバリにこなしている外科系の面々。医師会の要職に就いての社会貢献、緩和ケア、看取りの哲学、がん患者さんの家族へのサポート、等々。卒業三十年も経つと仕事上の力の入れどころも多彩でした。

一方、「仕事以外のマイブーム」も様々で、二十分で息切れしていたジョキング

からフルマラソンランナーへ。自家用車に自転車を積んで同窓会へ参加されたロードバイクの達人。スポーツジムの重要日課、家庭菜園の醍醐味、ピアノを始めました!、等々。ご自身の闘病経験を語られる方々もいらつしやり、改めて再会の喜びを分かち合いました。

その後、卒業アルバムのスライドショーに大爆笑し、直近の大学病院ツアーを供覧して母校が生まれ変わった感慨にふけり、母校への誇りを新たに致しました。

宴会終了後、離れに戻ってからは、ラウンジで深夜まで語り尽くし、話題は途絶えませんでした。みんな、とってもいい歳の取り方をしている。ギラギラもガツガツもせず、誠に上等な温かい仲間との再会でした。何の遠慮もいらず安心して包み込まれるような場でした。我々の歳廻り、職務上でもプライベートでも様々なことを抱えながらも、それぞれがぶれない信念を持ち続け、しなやかに心に折り合いをつけながら頑張っている。そして誰もが心から母校を愛していることもよくわかりました。

翌朝、「次回は十年後ではなく、もう少し早く開催しよう」と、一夜限りのノスタルジアにキュンとなりながら、健康でいること、そして再開を約束し、三々五々散っていきました。

稿を終えるにあたり、今回の同窓会の企画・準備と当日の進行を共に行って下さいました仲間、そして気持ちよく参加下さり会を盛り上げて頂きました全ての同窓生に感謝とお礼を申し上げます。

出席者 四十七名(男性四十四名、女性三名、大学ツアーのみの参加一名含む)

(藤村 和昌 記)



敬称略
石田浩、石田文生、大山繁和、宮崎（加藤）あゆみ、加納昭彦、笠原善郎、蒲田敏文、川原範夫、川本潔、菊池豊、黒岡雄二、黄文正、佐藤士郎、佐野正登、犀川太、斉藤勝彦、斉藤研一、酒井康一郎、笹川寿之、佐々木正寿、里村吉威、澤重治、白崎直樹、杉山和夫、高仲強、竹川茂、土屋（高松）美津保、谷屋隆雄、津川喜憲、土屋弘行、富田寛、富松功光、永井国雄、中川俊信、長田茂樹、野口善之、野村祐二、長谷川光広、布施春樹、藤村隆、堀本孝士、越田（宮崎）理恵、山田秀治、山田裕治、三木（山本）秀樹、吉田豊、渡辺俊雄
（越田 理恵 記）

十全昔話

医学部卒業後の出来事

梅田 俊彦（昭和三十五年卒業）

*東京でのインターン生活

昭和二十九年三月に金沢大学医学進学コースに合格、昭和三十五年三月に卒業した。当時は一年間のインターン修練が義務化されていて、終了後に医師国家試験があった。三十六年六月に医師免許を取得した。

当時、インターン修練は指定された病院で受けなければならなかったが、地元の金沢では必ずしも満足のいく修練内容ではなかった。東京などの評判の良かった病院で受ける傾向があり、聖路加、東京国立第一、国立大蔵などの病院へ多くの先輩たちが出向いていた。同級生の水村君の誘いで世田谷大原町の東京国立第二病院（前身は海軍病院）で研修することになった。慶応大学医学部の系列の病院で当時の院長は野原先生（外科）であった。病院の向かいに清修館という寮があり、六畳間に二名の研修生が宿泊まりした。三室あり、私は同級生の後藤君と同室だった。食事は病院の職員食堂を利用した。

インターン研修生を統率する伊藤先生は顔が長いので「馬さん」と呼ばれていた。声が大きくきびしかった。内科、外科とその他の科の三つに分かれて、内科、外科は三か月（？）づつその他の科のクライン（科）は短い期間をローテイトした。それぞれの科には責任医がついて厳しく指導、教育してもらった。

私の最初の配属は「放射線科」であった。最初の仕事はなんと、いきなり静脈注射であった。ガン治療中の入院患者

に、「コバルトグリーンボール」などを詰めた数本の注射器の入ったトレイを持ち、順番に静脈注射をして歩くのだ。最初の患者さんのベッドサイドに腰をかがめ、恐る恐る静脈に針をさした。幸い静脈が太くはいつてくれたが、後日その患者さん（佐藤さん）が、私の顔が真っ青で、手が震えていたといて、笑っていた。佐藤さんの顔も、その時の情景もはつきり覚えてる。

インターン控室での話題は静脈注射のことばかりであった。しかし、その後は次第に静注がうまくなった。また、緊張のあまり首に聴診器をかけたまま血圧測定のカフを握っていたなどの笑話もあった。

内科の研修で記憶に残っているのはいきなり腰椎穿刺をさせられたことであった。指導医の言われる通りに針を刺したが、うまく入った。何事も経験であった。外科では手術の鉤もちが最初の仕事で、虫垂炎の手術四十八例の助手を務め、当時は自分で手術ができると思った。皮膚縫合をさせられたので縫合が旨くできるようになった。耳鼻科では通気も覚えさせられた。

インターンの一年間の修練は誠に有意義で医師としての生涯に大きな影響を受けた。全国から来ていた皆とは今でも「東二インターン三十五会」を幹事持ち回りで開催し、旧交を温めている。

*第二内科への入局

学部三年生（昭和三十一年）の時に村上元孝教授が群馬大から着任された。ポリクリの時に始めてお目にかかった。著名な方であり、落ち着いた風貌、ゆつくりとした話し方など私の中にいつの間にか先生の医局に入局しようと決心が固まった。村上

教授は動脈硬化症の研究でも有名であり、血管壁と血液の両面から研究を進めておられた。入局時の面接で血液凝固・線溶系の第七研究室を希望した。チーフは上田好雄講師で、古谷浩昭、小竹要、松田保、恩地一彰先生がおられた。入局後しばらくして、上田先生から小生の研究テーマが告知された。「接触因子（Contact Factor）XI、XII因子」についてやれということ、数編の論文を紹介された。

テーマが決まったことは大変うれしかったが、反対に難事に対する不安も大きかった。まず、いろいろ文献を調べた。今のうちにインターネットで次々と手に入るわけではなく、図書館通いでの仕事であった。

内因性血液凝固系は先ずXII因子が活性化し、引き続きXI因子が活性化して開始される。XI、XII因子の発見はそれぞれ昭和二十八年、昭和三十七年である。XII因子の測定は欠乏血漿の入手は困難であり、測定はできなかった。当時、人工的にXI因子だけ除去した血漿の作製が考案された。異物面であるセライトで血漿を処理し、接触因子を活性化し、活性化接触因子が減衰した、exhausted plasmaを作製し、それを基質として第XI因子量を測定した。

主として入院患者様の各種病態の接触因子活性を測定した。ただ採血の注射器、針、試験管はすべて異物面であり、表面のシリコン化が必要であり、処理、乾燥が大変であった。当時は週二回位アルバイトに出かけていて、夜帰ってから測定し、深夜に帰宅することは屡であった。

一番印象に残っているのは、あるSLEの患者血漿の接触因子活性が殆どゼロという結果が出た、何回測定してもゼロであり、循環抗凝血素ではないことも確

認した。とすれば接触因子欠乏症ということになる。当時の接触因子系の世界的権威者のOscar D.Ratnoffの所へ凍結乾燥血漿を送り、XI因子とXII因子のassayをお願いし、本例は高度のXI因子（PTA）欠乏症と診断された。

家系調査も行い、患者は血族結婚によるmajor deficiencyで叔母も一人同様でminor deficiencyが計五名発見された。

もう一人、やはりSLEの方でcontact activityが〇〇十二%と低かったが、activation productは正常で循環抗凝血素による見掛け上の低下であった。

いろいろ苦勞も多かったが、以上のような喜びもあり、恵まれた研究であった。昭和四十三年に「接触因子に関する研究」の論文を日本血液学会雑誌の別冊として印刷した。

*勤務医から開業へ

昭和四十三年六月から約三年、社会保険鳴和総合病院へ勤務した。当時の浅地忠院長は診療所から病院を築き上げた方で、厳しさの中に優しさを持つておられた。私に当時県内に二病院にしかなかった血液透析室を作れとの指示で、名古屋や広島で見学、研修し、透析を管理した。当時はデスポはまだまだなく、透析膜を張って透析をしていた。外シャントから内シャントへ変わり、インターン時の経験が役に立ち、はじめ外科に頼んでいた手術も自分でできるようになった。昭和四十六年八月に内科医院を開業し、平成二十五年三月末に長男に医院を委譲した。

梅田先生は本記事投稿後の平成二十六年五月二十一日に逝去された。（編集委員会）

大学勤務医から町医者へ、 医師人生振り返る

石川県鳳珠郡能登町松波

升谷 一宏（昭和四十六年卒業）

十全同窓会会報編集委員で金沢大学医学類長兼医学部長の山本健麻酔科蘇生科教授（当時）から十全同窓会会報「十全昔話」への投稿依頼が届きました。内容については「一献傾けながら後進に話して聞かせる、心に残る体験談」という雰囲気が高く書いてあり、又既掲の「十全昔話」の筆者を見ると私の親の世代の先生方や学生時代某病院のCPCに参加した際表示された病理標本のスライドでこれは何かと質問され返答に窮していると「Rokiansky-Aschoff sinuses」わからないのか」とお叱りを受けた当時米国留学から帰られて間もない武川昭男先生、石川県医師会報に精力的に投稿されている大先輩で論客の中村彰先生等ではないと中々原稿執筆に手が付かずとうとう締切も迫った九月になってしまいました。が、卒後四十年以上が経ち、高齢化が凄まじい勢いで進む医療過疎地の奥能登で開業し三十年余りが経ってしまった今、学生時代、大学勤務医時代のこと、現在私がやっていること、印象に残る患者さん等について短期記憶障害がいささか気になり始めた我が脳の記憶を辿ってみました。

私の卒業年は巷には五木ひろしの横浜たそがれや小柳ルミ子の私の城下町が流れる昭和四十六年ですが、当時は全国津浦々に学園紛争の嵐が吹き荒れ金沢

大学医学部もその例外ではありませんでした。学部三年から四年にかけては学級封鎖等で休講となることも多く、卒業式も出来ないままどくさくさの中で学生生活を終え卒業後は当時の金沢大学医学部第二内科へ入局しました。入局後は物心ついた頃から心臓弁膜症を患っていた父が心不全増悪呼吸困難で苦しんでいる姿を度々目にしてきたこともあり躊躇なく今は泉下の村上映二先生がチーフだった循環器グループを志願しました。入局当時の金沢大学医学部附属病院にはX線CCTやシネアングロ装置は無論超音波診断装置も使えず病気の診断は問診や理学所見、特にリウマチ熱に起因する心臓弁膜症がまだまだ多かった時代でもあり聴診が主体で坂本二哉先生が執筆の分厚いテキスト「臨床心音図学」をいつも傍らに置き診療に当たったもので、心雑音や異常心音を如何に聞き分け診断するかが循環器内科医の腕の見せ所の一つであった時代でもあったようにも思います。

その後昭和五十年四月、内灘に金沢医科大学附属病院がOpenとなり金沢医科大学循環器内科へ移り八年間在籍しましたがその間、画像診断装置を始め最先端の診断機器が次々と導入され、血行動態モニターのためのSwan-Ganz Catheterも普通に使用できるようになり、心不全治療に対するconceptが変わり、又虚血性心疾患の治療も冠動脈大動脈バイパス手術や（北陸で初の冠動脈バイパス手術は金沢医科大学で行われ、患者さんは石川県珠洲市蛸島町の方だったと記憶しています）、経皮的冠動脈再建術も行われ始め循環器疾患の診断、治療が目覚ましく進歩していった時代を大学

で過ごし循環器内科医として少しは仕事ができるようになってきたと思っていた矢先、旧珠洲郡内浦町松波（金沢大学医学部前の高安右人先生の胸像の製作者山瀬晋吾氏は松波町出身です）で開業していた父が亡くなり、隣の小木町には三名の先生が開業しておいでしましたが、松波町の医療機関が升谷医院だけだったこともあり行政の強い要請に押され開業に対する何の心の準備もないまま急遽故郷に帰り大学病院勤務医からいきなり高齢化が進む地域で開業医としての人生が始まりました。

開業当初は週一回ですが公立穴水総合病院循環器内科外来も担当し二足の草鞋のスタートでしたが、隣の小木で開業されていた先生方もその後お亡くなりになったり、高齢のため廃業されたりして当時は一人近くの人口があった町に医療機関が私の施設だけとなることとなり（私の同期の武田公男君がその後小木町で開業しましたが、その武田君も平成二十四年十一月に他界）升谷医院の診療に専念することとなりました。開業医としての通常の診療に加え、遠く離れた日本海や太平洋で操業している小木漁港所属の漁船員の病氣や外傷に対する相談、介護保険が発足後は介護保険関連業務等々色々な場面に遭遇し、様々な患者さんの対応に迫られ他の医療機関、福祉施設や行政等との連携の必要性を痛感させられもしましたが、以下開業後体験談を二、三取り上げたいと思います。

*漁船員の疾病や外傷に対する相談

これは小木漁港に所属する日本海や太平洋沖で操業する船舶（シップドクターは無論乗船していません）から電話で連

医学部の頃

三林 裕 (昭和四十六年六月卒業)

絡があり対応を咄嗟に判断指示するもので、鮭鱒漁や底引き漁が盛んだったころは現場が陸から遠く離れたオホーツク海や太平洋で時には南米ペルー沖からも電話がかかってくることもありました。多くは急性胃腸炎や上気道炎で手持ちの薬で何とかなるのですが、時には消化管潰瘍穿孔、胆道結石、急性心筋梗塞、脳血管障害、尿路結石等が疑われることもあり急遽近くの港に入り病院へ行くよう指示しても、現場から港まで全速で走っても二日も三日もかかることもあり急性心筋梗塞のため亡くなられた方もおいてました。

* 病診連携が功を奏し危機一髪で救命し得たケース

一、昭和三年六月十一日生まれの男性、平成十二年十月二十一日、急性心筋梗塞、心原性ショック、うつ血性心不全状態で受診、応急対応をしながら金沢医科大学病院へ救急搬送、I A B P 下で緊急冠動脈造影を施行、左冠動脈#5も含め重度三枝病変で、緊急冠動脈大動脈バイパス手術を受け救命、

二、昭和五年二月二十二日生まれの女性、平成二十一年二月十七日起床後胸苦、呼吸困難のため受診、升谷医院到着直後心肺停止状態となり即A E D 施行、蘇生し七尾市恵寿総合病院へ救急搬送。緊急冠動脈造影で、冠動脈左前下降枝#6の完全閉塞が確認され緊急に経皮的冠動脈形成術を受け救命、現在は自宅から徒歩で通院、等です。山本健先生のご意向に沿う内容になったかどうかはなはだ疑問ですが、同窓の先生方の酒の肴にでもしていただければと思いますながら擲筆とさせていただきます。

昭和四十年三月、私は金沢大学医学部入試を古い木造の医学部講堂で受けた。教養課程は金沢城内へ通った。小立野に下宿していたので、兼六園が通学路だった。桜からカツバタ……と季節の移ろいを感じながら歩いた。入園料は無く、兼六公園と呼ばれていた。真夜中に、卒後名古屋へ帰った大原清仁君と兼六公園のベンチで暗い卯辰山を見つめながら、彼の吹く琴古流の尺八を聴いたこともあったし、卒業後、アメリカへ渡った服部正和君と真夜中に小立野界限を歩き回った。あの頃は、それぞれ、寂しがりだったと思う。大学病院前が終点のひとつだった市電が廃止され花電車に哀愁を感じたのもこの頃だった。

その頃から医学部校舎の建て替えが始まっていた。学Iになり小立野で学び始めた頃には臨床系は鉄筋コンクリートにほぼ建て替わっていたが、基礎系はいかにも明治・大正の木造二階建てで、病理学、生理学、生化学、微生物学、法医学など各教室に階段教室があつて、講義毎に迷路のような暗い廊下を渡り歩いた。今はそれがどんな配置だったか複雑すぎて全然思い出せない。特に解剖実習室への長い渡り廊下は暗くなると、一人では恐かったが、山田致知教授の長年のご尽力で私たちの学年の実習途中で明るい新解剖棟へ移ることができた。

その実習室の入口に額が掛けられており、「どうせ灰になるのだから死んだら若い医学生のために役立てて欲しい」という趣旨の社会的に功なり名遂げた立派な

方の歌だった。先生はいつもこのような篤志解剖遺体に対して、人として感謝の気持ちを感じないように説いていた。が、当時、全国の医学部で登録医制度反対運動が湧き起り、私たち学Iも香林坊へのデモに参加したり、さらにはクラス討論会のために教授の承諾が得られないままに解剖実習時間もそれに使ってしまった。

この時、教授はおおいに落胆され、その分大変厳しく叱責された。また、医学部の誇りであった薬理学の岡本肇教授にも、クラス討論会のために講義時間を下さいと申し出ると先生は、「はい、いいです」といつもの温厚な笑顔で応じて下さった。

後日、薬理学助教教授の正印先生に、「君たち、心無いことをしたなあ。あれが岡本先生の最後の講義だったんだよ」と言われた時は胸が痛んだ。その後、登録医制度は国会で成立した。そして医学部と基礎系の建て替えも進んでいった。街の何処からか、ビートルズの「ヘイ・ジュード」が流れていた頃だった。

学IIIの時、東大医学部から始まった大学紛争は京都大学へ、そして全国へ拡大。金沢大学でも医学部から紛争は拡大し、私たちのクラスでも真剣に討論会を繰り返した。そして、ついに学生ストを行うか否か、全医学部学生集会で延々と討論された結果、賛成多数で学生ストが決定される事態に至ってしまった。その頃の日本全体を覆っていた空気を説明するのは難しい。

学生にスト権などない、と法医学の井上剛教授は卒業に必要な単位認定試験を強行し、学IVの先輩たちは完全に分裂してしまった。一か月単位でスト権確立集会が続く、今となると、どれだけ長くストが続いたのか定かに思い出せない。全

国の大学紛争は東大安田講堂の攻防戦から、ひどかったセクト間の争いなどを経て、終息していった。

学生ストが終わり、学IVになった私たちは講義の出席時間は足りていなかったが、学IVも押し迫った頃に、卒業試験を行い卒業させるとの方針が示された。卒業試験の日程は当然、過酷なものになった。一か月の間に、臨床系(基礎の一部も)の十数科目を実施するというものだった。

私はノートをしっかりと取れるタイプではなかった。三日に一科目ずつ分厚い医学書を読むしかなかった。もちろん、この日を予想して、前もって徐々に読み始めてはいたが、大変な負担だった。途中から気力、体力が続かなくなつて脱落する人が始まった。こうして、私たちの学年は昭和四十六年六月から十月にかけて分散して卒業していった。そのような生活の中でも、出席簿で頭文字が、ま・み・むあたりの同級生(私は三林の、み)がつるんで、何とか一科目が終わると、香林坊などで息抜きの飲み会などをやりながら、苦しい日々を乗り越えようとしていたことを思い出す。その一人、升谷一宏君とは、同じ能登出身(彼は松波、私は七尾)で、若い頃にそれぞれの出身地で活動し始めたため、学生時代をそのまま飲み会も継続して、助け合いながら四十年以上、能登で過ごしてきた。

私たちは、戦後のベビーブームと言われた世代の第一年目。私たちの成長と同期して日本は経済成長を続けた。ベビーブームと呼ばれた私たち世代は、半世紀以上を経て、何時の間にか団塊の世代と呼ばれるようになってしまった。

「私の宝物」

医学類四年 白崎 加純

十全同窓会の皆様、初めまして。医学類四年の白崎加純と申します。この「学生コーナー」の執筆依頼を受け、何について書こうか、私が他の人より優れている事は何か、という事を考えることで自分を客観的に見つめ直す良い機会となりました。クラスのみならず見る私はきつと「真面目で努力家で、クラスのリーダー的存在」であると思います。学年代表を務めさせていただき、講義室の真ん中の前の席を陣取って講義を聴き、テスト前には通称「みんなかすノート」と呼ばれる講義まとめノートを全科目で作リ、放課後は部活かアルバイトかという生活。よく周りの人からは「いつ寝ているの?」とか、「そんなに勉強して、嫌にならないの?」とか、「たまに休みたい時はないの?」と聞かれます。もちろん、勉強に疲れたり怠けたりなくなったりすることはあります。ですが、そのような時に私にやる気とエネルギーをもたらしてくれる「宝物」があるのです。今回、この場をお借りしてこの私の大切な「宝物」について書かせていただきます。

それは、一冊の平凡なノート。表紙にはアルパカの絵と「加純の勉強日記」の文字。高校三年生の時に書いていた勉強日記です。ここで少し、私の高校生活についてお話ししたいと思います。私は福井県出身で地元の公立高校に通っていました。高校二年生の頃の私の学校生活の中心は「勉強」ではなく、「部活・学祭・学校行事」でした。セラー服にラケットバック、鞆の中身は

ジャージとお菓子と音楽プレーヤーと財布。筆箱や辞書、教科書、ノート類は全て学校に置いてくるという不真面目な生徒でした。授業中も寝るか数学の問題集をするかで、好きな数学以外はほとんど試験対策をせずにテストに臨み、二十点代を平気で取るような学生でした。恐らく、今の私を知っている方からしたら想像できないと思います。模試での志望校の欄には一応「国立大学の医学部」と書いていましたが、もちろん判定は常にE。ですが、そのような状況に焦ることもなく淡々と毎日を送っていたのです。このような不真面目な私を勉強の道へと導いて下さったのが高二の時の担任の先生でした。先生に言われた言葉の中で心に残っているものがあります。高二の二月くらいのホームルームで、そろそろ受験生としての自覚を持ち始めた私たちに向けて言ってくださった言葉です。「君たちはこれから受験勉強というフルマラソンに突入する。ゴールは決まっている、二月二十五日。これは誰も変えられない。誰からも助けてはもらえないし、ズルもできない。自分のペースで走り続けなければならぬのだよ。途中、棄権したいと思えば簡単に棄権することだってできる。本当に過酷な戦いだと思う。だけど、普通のフルマラソンと二つだけ違うことがある。それは、スタート地点を自分で決められること。フライングしたって失格にならない。人より早くゴールしたければフライングスタートすれば良い。」

この話を聞きながら周りを見渡してみると、みんな真剣に聞いてメモを取っていたりして、周りの人に既に大差を付けられている自分に気付きました。そして、今まで怠けた学校生活を送ってしまったことを後悔しました。丁度この頃、自分と親しくしていた先輩達の合否が出てきて、次は自分の番だと一気に受験が現実味を帯びたものになってきました。この日から私は「勉強」をすることに目覚め、春休みが始まってまだ誰もいない塾の自習室に朝から夜まで籠り始めました。今まで数学以外まともに勉強していませんでしたからこの時の成績は最悪でした。到底、医学部を目指す人の成績ではありません。まずは医学部に合格するために必要な点数を調べ、年間の簡単な勉強スケジュールを立て、その日に勉強したことや簡単な感想などをノートに書いていきました。1ページ目には「本日より受験勉強を開始する。今のままじゃ絶対に無理だけど落ちる気はない。全力で走るのみ。」という文字。この時の自分は根拠のない自信に溢れていて、その根拠のない自信だけで毎日頑張っていたと思います。今でも困難にぶつかった時や進路に迷った時にはこのページを開きます。そうしたら、どんなことでも可能になるのではないかと、いう根拠のない自信が湧いてくるのです。

受験勉強を始めたばかりの頃は成績もどんどん伸びて、ノートにも前向きな文字ばかり並んでいます。ですが、ノートに丁度真ん中あたり、十月らへんのページは涙でぐちゃぐちゃになっている部分が多々あります。十月といえば、外部模試のピーク時期。毎週毎週模試があつて、それに伴って毎週毎週成績が返ってきて、センター試験まであと百日を切り、根拠のない自信だけでは乗り越えられない現実。私の場合、スタート時点での成績が最悪でしたからこの時期での合格判定もE。絶対に合格したいという気持ちと伸び悩む成績とのギャップに苦しむ毎日でした。塾の自習室で勉強していてもこの先のことを考えると不安に押し潰されそうになり、トイレで隠れて泣いていたこともあります。この時期、体調だけは崩さないようにと毎日母親が塾の自習室まで昼食や夕食を持ってきてくれました。それを飲食スペースで食べながら、手作りご飯の有難さと美味しさに自然と涙が出てきたこともあります。それと同時に応援してくれている家族や先生、友人の為に極限まで頑張ろうと思えました。あの時の自分の気持ち、決意も全てこのノートに記されています。

一年間の努力が実って無事に第一志望校に合格することができ、受験期に涙が出る程苦しんでまで手に入れたかった生活を今自分は送っています。専門科目の試験勉強に疲れた時や何となくヤル気が出ない時、ふとこのノートを開いてみます。涙で濡れたページを見ると、「ああ、ここで諦めたらあの時頑張っていた自分に顔向けできない」と思っただけで自然とヤル気が出てくるのです。

これからも時折このノートを見返しながら、自分の将来の目標に向けて日々努力を続けていきたいと思います。そして二年後、クラスの全員が国家試験に合格して笑顔で卒業できるように、というのが今の私の目標でもあります。自分に任された任務を全うして、残り僅かな学生生活を素敵な仲間と共に充実したものにしていきたいです。

第八回 金沢大学 ホームカミングデー

今年で八回目となる、「金沢大学ホームカミングデー」を十一月一日(土)に開催いたします。また、一昨年から始めました「留学生ホームカミングデー」を、今年も同日に開催いたします。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

ホームカミングデー当日は、角間キャンパスにて「第五十一回金大祭」(十一月一日(土)～十一月三日(月))、ふれてサイエンス&てくてくテクノロジィが、宝町キャンパスにて「医学展」が開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。

また、金沢城公園では写真展「よみがえる城内キャンパス」を開催いたします。記念懇親交流会(参加費無料)は、角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気軽にご参加いただけるよう、

医学展二〇一四 開催に向けて

昨年に引き続き、今年度も十一月二日に医学展を開催する事が決定致しました。医学展二〇一四開催に向けて、同窓会の皆様方には、ご支援ご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

昨年度は「MORE」というテーマを掲げ、医学展も例年以上により盛大に開催されました。医学展の歴史は古く、昭和二十七年の官立金沢医科大学時代に始まります。その当時から現在に至るまで、

企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみならずと一緒で、晩秋の金沢へどうぞお越しください。

◎参加費…無料

◎申込み締切…十月十七日(金)

◎申込み・プログラム等の詳細は左記まで

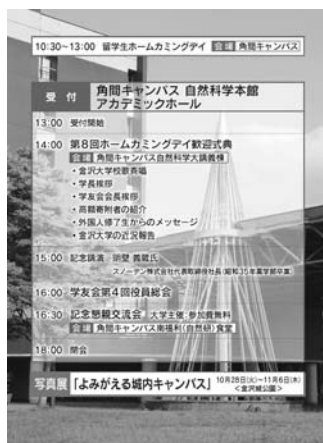
【金沢大学学友支援室】

TEL 〇七六―二六四―五〇八一

FAX 〇七六―二三四―四〇一五

メール sakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

(学友支援室長 上地 進 記)



医学展は常に医学を発信し、また私達学生が日頃学んでいる医学を見つめ直す事のできる場でありました。今年度もそのような医学展を開催できる事を非常に嬉しく、ありがたく思っております。

医学展二〇一四開催に向けて、私達は「ツナグ」というテーマを掲げました。このテーマには二つの願いが込められております。一つは、金沢大学医薬保健学域の学生が、医学展の活動の中で、学類学年の枠を越えて絆を繋ぎ、大きな輪を創ってほしいという願い。そしてもう一つは、来場者の方々との交流を通して、学生同士で繋いだ輪を、さらに私達の地域、金沢市、そして石川県全体に広げて

いきたいという願いです。今まで行ってきた病院見学や健康チェック、内視鏡体験に加え新たに、人の消化管をモチーフにした人体迷路や、昨今話題となっているiPS細胞に関する実験、スポーツ医学をベースにしたけが予防のトレーニングなど、今までになかった企画も多数予定し、来場者の方に、医学をより身近に感じてもらえるよう、全体として学生との交流と体験を重視する内容となっております。またステージ企画では、劇を交えながら医学に触れてもらえる企画を予定し、他の文化祭では味わう事のできないような「医学」展にしたいと考えております。模擬店においても、石引商店街の方にも出店していただき、地域の方と学生が交流できる場になって欲しい、と考えております。

一個人に過ぎない私個人の意見を書いておこがましいのですが、本来医療とは医療従事者と患者の間の信頼関係の上に成り立つものであり、患者に寄り添い、患者の想いを理解し、医療を行うことが何よりも重要と考えております。金沢大学医学展は、学生が様々な世代の地域の方のお話に伺うことができる機会が多く、他大学の学園祭とは一線を画すものであります。これは、将来医療の現場で働く学生にとって、医療の本質を考える手助けになると信じております。

このような機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ、学生として今何ができるかを考えながら、貪欲に取り組んでいく所存であります。お忙しい中恐縮ですが、足を運んでいただけますと幸いです。

末筆ではございますが、日頃からのご支援、ご鞭撻に感謝してご挨拶とさせていただきます。

医学展実行委員会 委員長

五年 玉木 理仁 記

編集後記

本年五月より大島徹前編集委員長から編集委員長の任を引き継がせていただきました。前号(第百五十七号)から編集委員として加わったばかりで、本会報の編集業務を十分に理解しないままに任につくこととなり、いささか困惑していましたが、長く編集委員を努めておられる若山友彦先生と事務局山岸浩子さんに助けられつつ、委員長としての職責への理解が深まり、このたび第百五十八号を無事に発行することができました。

私は昭和六十一年本学医学部卒業で、留学と市中の病院に出ていた約三年間以外は、宝町キャンパスで過ごしてきました。木造建築が残存していた時代を知っています。本号にあるごとく、宝町キャンパス整備は終盤にさしかかっており、旧臨床研究棟解体と百五十周年記念の一環として計画されているプロムナード整備が終了すれば、一気に生まれ変わります。そのような時期に委員長を務めることができ、これにすぐる喜びはありません。

さて、本号でご挨拶をいただいているとおり、長きにわたって同窓会活動を支えてこられた佐藤保会長、加藤聖理事長がご退任されました。紙面ではございますが、ご尽力に感謝申し上げるとともに、両先生の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

昨今、新卒業生の同窓会入会率がかんばしくありません。本会報がその解消の一助となるような紙面作りができないものかと考えたりしています。中村信一新会長、大井章史新理事長のご指導をいただきながら、編集に携わる諸先輩および同僚の方々と力を合わせ、精一杯務める所存です。会員諸先生のお力をお貸しいただければ幸いです。(絹谷 清剛 記)